おおいた教育の日

エッセー作品集2

平成22年度～平成28年度

大分県教育の日推進会議
大分県教育委員会

「おおいた教育の日」エッセー作品集２の刊行に当たって

大分県教育の日推進会議　会長　清松　督雄

大分県では、学校・家庭・地域社会の相互の協力により、 明日の大分を担う心豊かでたくましい子どもたちを育成し、地域社会の振興に主体的に参加する人づくりを進めるため「おおいた教育の日条例」を平成17年３月31日に制定しました。この条例の普及・定着を図るため、学校関係団体や社会教育関係団体をはじめとする129団体で構成される「大分県教育の日推進会議」が中心となって、「おおいた教育の日」推進大会の開催やエッセーの募集、普及期間の取組等、県民の皆様の教育に対する関心と理解を深めていただくための活動を今日まで推進して参りました。

特に、「おおいた教育の日」エッセーについては県内外の皆様からこれまでの12年間で8,695点もの御応募をいただき感謝申し上げます。

御応募いただいたこれらの作品中には、地域やふるさとでの出来事や人との出会いの中で自分自身が成長したことや学んだことなど、作者のさまざまな思いが込められています。毎年「おおいた教育の日」推進大会で受賞される作品は、大会で朗読され、参加者の感動を呼んでいます。

このような中、これらの作品を、「もっと広く、多くの方々に読んでほしい」「学校でも児童、生徒に読んでほしい」との声を多くいただいたことから、平成22年３月に刊行した「おおいた教育の日」エッセー作品集に引き続き、エッセー作品集２を刊行しました。これには、平成22年度から平成28年度までの最優秀賞、優秀賞となった作品、全50点を掲載しています。 どれも作者の思いのつまった作品です。ＰＴＡや地域の皆様にも、ぜひご一読いただきますとともに、学校などさまざまな場面で活用していただければと願うところです。

結びに、刊行にあたりまして、御協力いただいたみなさまに、心から感謝とお礼を申し上げます。今後ともこれからの大分を担う子どもたちの育成のために、「おおいた教育の日」の取組への一層の御理解と御協力をお願いし、刊行に当たってのごあいさつといたします。

平成29年３月

「おおいた教育の日」エッセー作品集２
目　　次

平成 22 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「おおいたの子どもたちへ」　井上　杉夫　豊後高田市 ……1
優秀賞
「生きる希望を見つけて」　楠　智恵　日出町 ……2
優秀賞
「地球を愛し、地域に愛される子に育って欲しい」　竹永　祐子　大分市 ……3

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「わたしの心に残ること」　吉田　月菜　大分県立佐伯鶴城高等学校２年 …4
優秀賞
「みんなと一緒に」　須股　凛　日出町立日出小学校６年 ……5
優秀賞
「人の手のぬくもり」　赤峰　希美　佐伯市立佐伯城南中学校３年 ……6
優秀賞
「三十年の十月」　見藤　素子　大分大学教育福祉科学部４年 ……7

平成 23 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「父の背中」　福田八重子　国東市 ……9
優秀賞
「秋の空」　吉田　道代　臼杵市 ……10
優秀賞
「東日本大震災から学ぶ～仲間の絆～」　竹永　祐子　大分市 ……11

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
私の「家族」　浅利　里彩　佐伯市立佐伯南中学校１年 ……12
優秀賞
「私の心に残ること」　藤本真理乃　大分市立住吉小学校６年 ……13
優秀賞
「おばあちゃんの書」　田﨑　萌亜　大分県立大分豊府中学校３年 ……14
優秀賞
「重度障がい者施設を訪れて」　髙野　倫佳　大分県立津久見高等学校２年 ……15

平成 24 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「いじめられっ子だって」　吉田　道代　臼杵市 …… 17

優秀賞
「母から教えられたこと　母に返したこと」　井上　杉夫　大分市 …… 18

優秀賞
「子供達の豊かな成長のために」　田北　善子　日出町 …… 19

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「バリアフリーな人付き合い」　岡本　夕佳　大分県立大分豊府中学校３年 …… 20

優秀賞
「骨折に気づかされたこと」　本川　茉奈　日田市立若宮小学校６年 …… 21

優秀賞
「福祉の現場で考えたこと」　長野　裕貴　大分県立野津高等学校３年 …… 22

優秀賞
「ひとりだけの卒業式」　三浦　楓　大分県立芸術文化短期大学１年 …… 23

平成 25 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「第二のふるさとと呼ばせて」　古賀　深雪　豊後大野市 …… 25

優秀賞
「別府の誇れる銭湯文化」　後藤　元子　別府市 …… 26

優秀賞
「ふるさとを元気にするために」　福嶋　祐彦　大分市 …… 27

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「六ヶ迫（ろっかさこ）」　木村 カロリーナ りえ　大分県立大分鶴崎高等学校２年 …… 28

優秀賞
「神楽を受けつぐ」　宮本　大輔　竹田市立菅生小学校５年 …… 29

優秀賞
「あの時計」　小代　星希　大分県立大分豊府中学校２年 …… 30

優秀賞
「去っていく時間」　工藤 明日香　大分県立芸術文化短期大学１年 …… 31

平成 26 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「私にとって健康とは」　新谷　良子　佐伯市 …… 33

優秀賞
「心が健康である」　石和真希子　大分市 …… 34

優秀賞
「百歳まで生きる」　山本　晋滋　大分市 …… 35

【小・中・高等学校・大学の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「食は健康の源」　岩下野乃花　日田市立三隈中学校１年 …… 36

優秀賞
「健康について」　中野　和奏　日田市立有田小学校６年 …… 37

優秀賞
「『昼食格差』と健康」　大塚　真愛　大分県立三重総合高等学校２年 …… 38

優秀賞
「私の祖父と祖母」　古園　千紘　大分県立芸術文化短期大学１年 …… 39

平成 27 年度 最優秀賞・優秀作品

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「僕の居場所」　下山　尚美　豊後高田市 …… 41

優秀賞
「父の本棚」　朝日　容子　大分市 …… 42

優秀賞
「『路傍の石』を再読して」　板井奈穂子　大分市 …… 43

【小・中・高等学校・大学の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「キラキラさかな」　瀬田　夏未　国東市立国東小学校１年 …… 44

優秀賞
「私の礎をつくるもの」　尾形　萌音　大分県立大分豊府中学校２年 …… 45

優秀賞
「曾祖母（そうそぼ）の温もり－読み聞かせをとおして－」　佐藤　悠衣　大分県立三重総合高等学校１年 …… 46

平成 28 年度 最優秀賞・優秀作品

【小学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「杵築市の自まんカブトガニ」　松藤　龍哉　杵築市立杵築小学校４年 …… 47

優秀賞
「歴史を感じて」　阿部　雷蔵　杵築市立大内小学校４年 …… 48

優秀賞
「わがまちの誇り」　手島　悠斗　杵築市立豊洋小学校５年 …… 49

【中学校・高等学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「わたしのまちから全国に」　森﨑　澪　大分県立鶴崎高等学校２年 …… 50

優秀賞
「ふるさとの力とこれからの大分」　太田　美緒　大分県立鶴崎高等学校２年 …… 51

優秀賞
「大分の風に思いを託して」　川村　萌　大分市立滝尾中学校３年 …… 52

【大学等・一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「ご先祖様とつくるふるさと」　手嶋　郁子　玖珠町 …… 53

優秀賞
「由布には菜の花が」　朝日　容子　大分市 …… 54

優秀賞
「忘れえぬ景色のあるまち」　堀内真由美　杵築市 …… 55

※年度ごとに最優秀賞、優秀賞の順番で掲載しています。なお、在住地等及び学校・学年については受賞当時のものです。

平成22年度
最優秀・優秀作品

一般の部
　テーマ「おおいたの子どもたちへ」

小・中・高・大学の部
　テーマ「私の心に残ること」

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「おおいたの子どもたちへ」

豊後高田市　井　上　杉　夫

今年の全国高校野球選手権大会、沖縄県代表の興南高校が沖縄県勢として初めて優勝し春夏連覇の偉業を達成した。決勝戦の放映中に興南のキャプテン我如古（がねこ）君の小学校の卒業文集が紹介された。そこには「努力」「自信」「信頼」「夢」「甲子園」「必勝」と書かれていた。小学生の書いた作文を見て、私は思わず「すごい」そして「かっこいい」と唸っていた。自分が小学生の頃、どれだけ夢中になって追いかけられるものがあっただろうか。勿論私だけでなく、多くの高校野球ファンがこのエピソードに触れたことだろう。しかし、私は我如古君と同じ年代の子供達に、この言葉を噛みしめてもらいたい。ゲームやインターネットが遊びの主流になりつつあり、見かけの格好良さがもてはやされるこの頃、歯を食いしばって頑張り、勝てば達成感の、負ければ悔しさの涙を流す。そんな一途さが人の生活から失われているような気がする。子供の頃、宿題をやろうとしている時に母から「宿題はやったんかい」と怒られると「今やろうと思っとったんに」と、途端にやる気がなくなったことはないだろうか。外見上は同じ行動に見えても、人からやらされていると思いながらやるのと自分の意思でやるのとでは、結果は全く違ってくる。それは、自らの「努力」が「自信」や「信頼」を生んでくれるからである。そして、「努力」できるのは、はっきりとした「夢」や「目標」があるからなのだ。では、「甲子園」の「必勝」（優勝）を目指した我如古君達、興南の選手がどんな「努力」をしたか。それは、我喜屋（がきや）監督がおっしゃっていた。「小さな事を毎日コツコツと確実に積み上げること」だと。それこそが「夢」を叶える唯一の方法なんだと思う。

しかし、毎日コツコツと努力することは、口で言うほど簡単ではない。簡単ではないからこそ、それができたことは揺るぎない自信になり、周りからの信頼につながる。どうせこの世に生まれたからには、自信を持ち、胸を張って生きていこう。

夢に向かって努力することの他に、人として持っていて欲しいものは、他人を思いやる心である。大人になってどんな職業に就こうが、無人島で生活するのでなければ、人は他人との関わりなくして生活することはできない。いつの頃からか、日本人は、思いやりや連帯感よりも個人の権利や自由を主張するようになってきた。それが、自分さえよければそれでいいといった考え方や、他人が困っていても見て見ぬふりをするといった行動に表れるようになってきた。

2002年のワールドカップサッカーで、カメルーンのキャンプ地となった（旧）日田郡中津江村。あの時、予定より何日も遅れ、しかも真夜中に着いた選手をそれこそ村中で暖かく迎えたことで日本中が中津江村フィーバーに沸いた。しかし、当の村民は、そんなに騒がれるようなことをしているとは誰も思っていない。はるばる地球の反対側から何日もかけて来てくれたお客さんを暖かく迎えるのは当然のことなのだ。その当然のことが当然に見えない寂しい環境に生活していることを知って欲しい。これからの人生では、仕事のうえでもプライベートでも、さまざまな困難やトラブルが待っている。その中には自分の経験や頑張りだけではどうしても解決できないこともあるだろう。そんな、人の助けが必要な時が必ず来るのだ。その時、自分勝手な生き方をしてきた人間に、あなたなら助けの手を差し伸べるだろうか。そう考えた時、人は決して自分本位に生きてはならないことが理解できると思う。思いやりを持って、時には優しく時には厳しく接することが、人として生きるために大切なことなのだ。そして、そうした君たちの生き方から、私たち大人もちゃんと学ばねばならない。いっしょに、そんな社会を作って行こう。

【一般の部】
優 秀 賞

「生きる希望を見つけて」

日出町　楠　　智　恵

今、いじめや不登校などで悩みを抱えた子供たちの自殺がニュースなどでも取り上げられています。自分の命を自ら絶つだけではなく、相手に矢を向けるケースもあります。私は、その原因の一つは、家族や友達とのコミュニケーションの不足が挙げられると考えます。

まず、家庭の中で両親や兄弟、祖父母など一緒に暮らしている家族との会話は十分にあるでしょうか。例えば、学校から帰宅して、皆で夕食を食べる時に、今日あった出来事などを互いに話したり、夕食のメニューの感想などを述べたり、会話は、ちょっとした事から、見つけることができます。家庭の中で十分な会話が足りていると子供たちの心も安心し、満たされると私は思います。

私も学生の頃は、ただ両親が話を聞いてくれるだけで嬉しかったものです。部活などで運動部に入っていたこともあり、その厳しさや自分の自信のなさに悩んでいた時は、母から一言、「でも智恵は、あきらめずに頑張っているじゃない。お母さんエライと思うよ。」と言われた時は、涙が出そうなくらいに嬉しかったことを覚えています。子供ってとっても単純なのです。ただ共感してくれる、ただうなずいて話を聞いてくれる、それだけで、とても心が落ち着くのです。でも逆に、自分の考えを否定されると、どうして良いのか分からなくなり、自分の思いを、まっすぐに伝えることができなくなってしまったり、心をふさいでしまったり、思春期の子供たちは特にそうだと思います。子供だって、一生懸命、考えて、親に何かを伝えようとしています。私は、その思いを一度、受け止めて、最後までじっくり話を聞いて、その上でアドバイスをしたり、私はこう思うよ、など考えを述べるなど話を聞く姿勢も大事だと思うのです。そうすることで、家族の絆は、もっともっと深まっていくと思います。

私は今から５年ほど前に、自殺で友人を亡くしました。その何日か前に会って話をしていたので突然のことにショックを隠しきれませんでした。その友人は職場での人間関係に悩んでいたそうです。心が優しく繊細だった彼だけに、一人で思い悩み、苦しんでいたことに、どうして気付いてあげられなかったのだろうと、私もひどく落ち込みました。

未来を担う若い世代の人々の自殺が絶えない、今の世の中。私たちは、どう向き合っていけば良いのでしょうか。

社会人３年目になる私も、人間関係で悩んだこともありました。でも人と関わっていくことは、生きていく上でかかせないものです。人と関わっていくから苦しいし、楽しいと思えるのです。長い長い人生。十代、二十代、三十代と、良い時もあれば、悪い時もあります。でも私は子供たちに伝えたい。今日とても悪い事があって、消えてしまいたいと思った時、もう一日だけ待って、明日を生きてみて！そこにはきっと昨日とは違う別のあなたがいるから。一日たてば、人の心もずい分と変わるものです。あれだけ涙を流し、落ち込んでいたのに、次の日はケロリと笑顔でいられたり。人生、何があるか本当に分からないものなんです。

いじめや不登校で悩んでいる小・中学生も数多くいると思います。そんな時、あなたには誰か一人でも心の支えになる人や物を見つけてほしいと思います。実在する人じゃなくても良いのです。マンガの中の主人公でも良い。あるいは、テレビドラマのヒロイン。自分が飼っているペット。大切にしているぬいぐるみ。何でも良いから、あなたが元気を取り戻せる大切なものを見つけてほしい。それはきっと生きる希望となってゆくから・・・

私は大人になった今でも子供のように泣いてしまう日があります。でもそんな日があるから、後になって、笑って話せる素敵な思い出になっていくのです。どうか自分自身の弱い心に負けないで今を生きていって下さい。

【一般の部】
優 秀 賞

「地球を愛し、地域に愛される子に育って欲しい」

大分市　竹　永　祐　子

「人は人の中で生き、人の中で成長する」地域の顔の見える関係の中で、他年齢層そしてより多くの人から愛情をかけられ影響を受け、子どもたちは心身共に健やかに育つそう信じている。

近年、人間関係の希薄化、コミュニケーション不足により社会性の乏しい若者や心病む子どもたちも増え問題となっている。なぜ、そうなってしまったのか。それは一概に家庭や学校の問題ではおさまらない。地域との交流の希薄化にも一因はあると思う。

今こそ、家庭･学校･地域協働の子育て、「地域の子どもは地域で育てる」といった意識や子どもが地域に溶け込む必要性を感じる。

私の住むこの地域でも、以前はご近所づきあいが盛んであり夏には夕方から祭りのお囃子と共に老若男女問わず集まり、伝統の盆踊りを楽しんでいたという。

今ではとても考えられない風景である。

しかし、まさにそのような風景が子どもたちと地域との結びつきを深めていたのではないかと思う。

私は、地域の方々とのふれあいを大切にし、子どもにも住んでいる地域を好きになって欲しい。その想いから地域の行事、祭りには必ずと言っていいほど子どもと共に参加している。おかげで、親子共々地域の方々と顔見知りになりかわいがっていただいている。

わが地域には数々の伝統行事があり、地域の方々と共に子ども達は行事を盛り上げている。その一つである400年もの歴史をもつ国選無形民俗文化財の伝統の盆踊りが毎年夏の暑い時期に盛大に催されている。私は子どもと共に踊り子としてその踊りの大会に今年初めて参加した。

踊り手の子どもたちは、大会が近づくと公民館に自然と集まり、毎晩地域の方に指導を受け、にぎやかに踊りの練習をする。時には、悪ふざけ、おしゃべりをして真面目に踊らない子がいると、おじちゃんの「お前たちしっかり踊らんか！」の一撃が飛ぶ。子どもたちは、一瞬ビシッと締りまた踊りの練習に励む。練習が終わると「よくがんばったね。さあごほうびよ」とジュースやアイスがふるまわれる。子どもたちは疲れを忘れて大はしゃぎする。

踊りの当日は、皆きれいにお化粧をし、きらびやかな衣装を身にまとい、地域の方々から「かわいいよ」「かっこいいね」と声をかけてもらい照れくさそうに笑顔で喜ぶ姿がみられた。

何とも心温まる微笑ましい光景である。

また子どもたちは暑さと疲れに耐え、２時間という長丁場を踊りぬき祭りを盛り上げる。

「なぜ踊りに参加しているのですか」とのＴＶインタビューに対し、みな「楽しいから」「みんなに踊りを見てもらいたいから」時には、「おじいちゃんやお父さんが踊りが上手なので私も上手に踊りたいです」と代々この踊りを受け継いでいる言葉も聞かれた。

子どもたちの祭りを楽しもう、盛り上げようという気持ちにも心強くうたれ感動した。

この盆踊りは、地域と子どもたちをつなぐ架け橋ともなっている。地域の高齢者や祖父母世代は、この優雅な舞を毎年楽しみにしている。若かりし頃はきっと自分も踊り子となり祭りを盛り上げていただろう。今は世代が変わり指導者、お世話役となり私達親子に伝統を伝えてくれている。とても感謝すべきことである。

子どもたちは、このような温かい地域の中で、たくさんの人に見守られ愛され育っている。地域の方のおかげで健やかに成長していることに感謝の気持ちをもって欲しい。

そして、伝統行事を守り盛り上げることこそが、地域の方々への恩返しにもなりうる。将来はこのよき伝統文化を支える後継人になってくれることを期待する。

わが子のみでなく地域の子どもたちみんなが、地域の方々に愛されながら健やかに成長してくれることを願う。

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「わたしの心に残ること」

大分県立佐伯鶴城高等学校２年　**吉　田　月　菜**

現代の社会は、便利な物に溢れ、多様化した機能で私たちの生活を豊かにしている。しかし、それらを使う者にはマナーが必要である。例えば、電車の中で携帯電話を使用することや大音量で音楽を聴くことなどは、周囲の迷惑になる。私が実際に目にして問題だと思ったのは、歩道の点字ブロック上に停めている自転車である。それを見てとても不快だった。目の不自由な人のことを何も考えていない行動に憤慨した。「なぜもう少し別の場所へ移動させることができなかったのか」と。自転車を停める時に場所を考えて停めることは、ほんの数秒時間をとるだけの小さな思いやりである。しかし、その数秒を惜しむことで、目の不自由な人がその自転車にぶつかり、こけてしまうこともあるのだ。そうなると倒れた自転車を立て直すにはとても時間がかかるし、打ち所が悪ければ一生残る傷になるだろう。そんなことも考えずに停めるのは、最低の行為だと感じた。しかし、本当に反省すべきは、私自身だったのである。このように考えるようになったのは、ある出来事からだ。

私の父は頑固で、よく言えば意志の強い人である。自分の正しいと思ったことは、誰に何を言われようと考えを変えることはない。常に自分の行動に自信を持っているようで、それが私にはとてもうっとうしかった。すべて自分が正しいかのように説教をする父が嫌いだったのだ。そんな父と、たまたま電車に乗っていた時の話である。その電車の中には十数人の乗客がいて、席はまばらに空いていた。父と私は、手すりに掴まって立っていたが、電車の揺れは大きく、手すりがなければ転びそうだった。そこに白い杖を持った一人の男性が乗車してきて、ドアのすぐ前で立っていた。私は白い杖が、目が不自由であることを意味していると知っていたので、手を貸すべきかどうしようかと悩んだ。目の見える私たちでも手すりに掴まっているのがやっとなのに、目が不自由な人が転ばずに立っているのは難しいはずだ。そう思いながら周りを見てみると、見て見ぬふりをする人や、ちらちらと男性を見ている人もいた。みんなその男性が目が不自由であることに気付いているようだったが、誰一人動こうとしなかった。すると私の横にいた父がすぐに男性の所へ行き、声をかけた。男性はにっこりと笑って、父に手を引かれながら空いていた席に座った。戻ってきた父に、私がさっき考えていたことを伝えると、「思うことと、実際に行動することとは違う。行動しなければ、思っていないのと同じだ。後悔する前に行動に移せ」と言われた。父の言葉を聞きながら、ふと男性の方を見ると、さっき男性を見ていた人がその横に座って、腕を掴んで支えていた。一人が行動することによって、周りが変わったのだ。

この時「思うことと行動することの勇気は別であること」、「まず自分が行動することで周りが変わること」を実感として知った。更に私は点字ブロック上に置かれた自転車のことを思い出した。あの時、私は不快には思っていたものの、何も行動に移さなかった。その自転車を見ていながら何もせずに通り過ぎたのは、目の不自由な人のことを考えていないのと同じではないか。あの時、私にできることがあったはずである。「もう後悔したくない。」と思った私は「したほうがよいと思ったこと」や「迷ったこと」はやってみようと決心した。

私はこの時から、行動することの価値を言葉ではなく、自らの行動で伝えてくれた父を尊敬するようになった。私も父のように行動できる人になりたい。そうすれば自分に自信が持て、人の行動を不快に思う時間も減り、私の心は平和だろう。『文明は進化していく。しかし、便利な機器は、人間のモラルの下で使われなければ凶器と同じになる。』とどこかで読んだが、今はこのことが実感として分かる。

「思いやりのある行動」の価値が、一人でも多くの人に伝わればと思い、この時の体験を「書く」という行動に移した私である。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「みんなと一緒に」

日出町立日出小学校６年　須　股　　凛

「どう思う。」と母が尋ねたのは、「オタマジャクシのうんどうかい」という本のことだった。私もその本は読んだことがあった。しっぽの短いタマのためにクラスの友達が話し合い、タマだけ泳ぐ距離を半分にしたのに、運動会当日、タマは友達が来るのを待って泳ぎ始めてしまった。私は、母に、「母さんこそどう思うの。」と尋ねてみた。母は、「タマのために考えてあげたつもりが、タマを傷つけてしまったのかな。」と答えた。私は、自分がタマや友達だったらどうするかなと迷った。

この春、家の金魚が卵を産んだ。小さな赤ちゃんがたくさん孵化したが、育てるのが難しくどんどん死んでしまった。最後に十二匹の赤ちゃんが残り、私は大きな水槽に入れて一生けん命世話をすることにした。

最初は、よく見ないと見つけられないほど小さな赤ちゃんたちだったのに、どんどん体の大きさに差が出始めた。もう、めだかほどになっている金魚もいるのに、まだ３ミリメートルしかないチビが一匹いた。私は、だいじょうぶかなと少し心配になった。えさをやると大きくなった金魚たちはパクパクよく食べる。泳ぐのもスイスイ速くて、水槽をいばって泳ぎ回っているような気がした。それに比べて、チビは水草の中にいつもかくれている。いつもいる場所が決まっていて、水草の葉の上にそっと体を休めているように見えた。私は、チビを応援したくなった。えさをチビの近くにまいたり、他の金魚がいじわるをしていないか見張ったりした。でも、チビはなかなか大きくならず、体の差は開くばかりだった。

ある日、いつもの水草の辺りを見るとチビがいない。水槽の中をあわてて捜すと、大きくなった金魚たちに交じって泳ぐチビがいた。体の大きさはずい分違ったが、一緒に泳いでいるように見えた。大きい金魚たちもいじわるはしていない。いつも水草の陰にじっとしていたチビが広い場所を泳いでいたのを見て私は自分のことのようにうれしくなった。

みんなと一緒に泳ぎ回るチビを見て、私は母の話を思い出した。あの時、タマはみんなと同じことをしたかったんだとわかった。タマにとっては、順位なんか関係なかったんだ。タマも、うちのチビも、「みんなと一緒に泳ぎたい」という夢をもってがんばっていた。それなのに私は、体が小さいからとか大きいからで弱いとか強いとかを判断していた。チビを応援していた私や、タマのことを思って相談したクラスの友達は、まちがってはいなかったけど、最初から「かわいそう」とか「できない」と思ってしまうのはちがっていたかもしれない。

「タマは、友達の気持ちをわかっているよ。友達もタマの気持ちがわかったと思うな。そして、私がタマなら、『みんなと一緒に泳ぎたいんだ。一生けん命がんばるよ。』と友達に伝えるよ。」と、私は母に話してみようと思う。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「人の手のぬくもり」

佐伯市立佐伯城南中学校３年　赤　峰　希　美

人の手の温かさを感じるとほっとします。

私は、時々、仕事で疲れて座っている母の背中にそっと掌をあててみます。

「のんちゃんの手は温かいなあ。服の上からなのに手の温かさがじんわりと伝わってくるなあ。なんだか落ち着くんだわ。」

母は目を細めて気持ちよさそうにしています。

そして、母の背中からも私の掌に温かいものがゆっくり上がってきて、ほわっと眠たいような気持ちになります。ちょうどお互いの体温とやさしい気持ちが私の手を介して、行ったり来たりするようです。そう言えば、昔の人は、病気やけがを人の手の力で治すと信じていたという話を聞いたことがあります。

私がこんな手の力を意識するようになったのは近頃のことです。でも、手の温かさがこんなに人の心を穏やかにするということは、既に小さい頃から知っていたのだろうと思います。

私が赤ちゃんだった頃、祖父は、足がしびれて痛いのを我慢しながらも気持ちよさそうに眠っている私を起こさないように、ひざの上に抱いていたそうです。その時の私は、たぶん祖父の手のぬくもり、ひざの温かさを感じて、安心していたのだと思います。

手の温かさといえば、祖母の作ってくれるおいしいおむすびがあります。おむすびは、特別に変わったところもない、真っ白のおむすびです。でも、祖母のおむすびは、他の人が作るおむすびとは何か違います。口の中に入れると、ふわっとしているけれど、米の一粒一粒が舌の先にはっきりと感じられる不思議に力がわいてくるようなおむすびです。そばで一緒におむすびをほおばっていた弟が、「おばあちゃんのおむすびって、どうしてこんなにおいしいのかな。」と聞きます。祖母はすかさず、

「それはね、おいしくなあれ、おいしくなあれって言いながら作るからだよ。」

と、笑いながら答えます。きっと、おいしいものを食べさせたいという気持ちが掌にぎゅっとこめられているからでしょう。

手の温かさは、人の心をほどいてくれます。

安心させてくれます。私は、生まれてからずっとまわりの人の手の温かさに包まれて、育ってきたのだと思います。最近、新聞やニュースでたくさんの、悲しい出来事、痛ましい事件を見聞きするにつけ、もし、この手の温かさを感じることができれば、伝えることができたら、と思います。手の温かさを人と人とがお互いに感じることができれば幸せになれるのに、前に進むこともできるのに。私は、生まれたこの家で手の温かさという大切なものをもらえたことをありがたく思います。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「三十年の十月」

大分大学教育福祉科学部４年　見　藤　素　子

十月の其の日、朝地の山奥の会場に、全ての準備を終えた私達は立っていた。所属するゼミの教授である佐脇健一氏の初個展の二日前。数名で最後の搬入と設置を行っていた。風化した建造物や懐かしい風景を思わせる彫刻作品群、その全てが完璧な計算の上に配置され作り出された空間の中で、私は誰にも気付かれないよう、声を殺して、泣いた。

私が佐脇教授の作品や考え方に共鳴と深い感動を覚え、佐脇教授の許で美術を学ぶことを決意し大分へとやって来てから、もう四年が経つ。入学した当初、誰かが言った。「大学は遊ぶところ。適当にやれば良い。」馬鹿な事を言う、大学は勉強する所だぞ。自分は決して現を抜かすまいと誓った。佐脇教授から最初に忠告されたのは「流されるなよ。」ということであった。

しかし、大学では毎日目紛しく様々なことが起き、現を抜かすまいと誓った筈の私は目の前の楽しい誘惑や苦しい心配事に、気が付かない内に流されて行ったのであった。制作する作品も混迷を極め、良いものではなくなった。何の為に創るのか、此れが私の望んだ事なのか。芸術とは、何の為にある筈だったのか。制作スペースとする場所でふと足許を見渡せば、薄っぺらな制作の痕跡が脈絡無く散逸している有様である。伝えたいものも伝わらず、泣いているかのような瀕死の其れが、一様に私の慢心と怠惰を指し示す。「まるでゴミのようだ。」口にこそ出さなかったが、胸の内で呟いた。

三年生になった頃、其の年の秋に開催されると謂う佐脇教授の個展の準備を手伝わせて頂く事となった。三十年に亘り教員を務めて来られた佐脇教授は此れが初めての個展であり、また、其の個展の計画は何年も前から為されているものであった。準備を手伝う内に、佐脇教授が六十年の人生の中で只管追い求め大事にしてきたものが何であるかに触れ、その重みに慄然とした。三十年。その間、流される事無く積み重ねられてきた確かな技術と、確固たる意志、自らの哲学。真に芸術を愛すること、向かい合う事がどういう事か。其の粋である作品達は恐ろしいまでに美しく、温かかった。人の心の根源に触れるようであり、そして、会場の大きな空間そのものを「佐脇健一の作品」と成していた。個展は大成功を収め、全国から観覧者が集まった。其の間、私は盗めるだけの技術を盗ませて頂き、学べるだけの心を学ばせて頂いた。言葉は深く耳を打ち、己の甘さを思い知らされた。此の機会を逃してしまったら、もう一生取り返しがつかないだろうと自分で分かっていた。

嘗て佐脇教授から怒られたことがある。「ハッタリだけの作品を作ったとしても、其れを誰かが貰ったとして、其の人は喜ぶと思うか？心を込めて作った作品は其れだけで人の心を打ち、ギャラリー一つの空間だって支配する。君はそんな作品を作る為に態々こんな場所までやって来たんじゃなかったのか？もう、自分が自分が、と言っている段階は疾っくに過ぎた。一番大事なことが何であるかを忘れるな。そして、美術を「学ぶ」と決めた以上、社会や文化の文脈を作り上げていく一員であるという自覚と責任を忘れるな。」、と。

其の言葉を思い出しながら、私は佐脇教授が心を込めて作ってきた作品を見て泣いていた。上手く言葉には出来ない。しかし、やっと「わかった」ことが嬉しくて仕方なかった。

翌日、学校の制作スペースの片付けを行った。散乱する瀕死の作品達を仕舞っていく。胸中で改めて己を恥じ、全てに詫びた。流されず、大事にするものの重み。学ぶことの有難み。忘れかけていた其れを、今一度思い出さねばならない。何の為にものを創るのか。芸術は何の為にあるのか。三十年後までに、私はきちんと責任を持って、心を打つ作品を作れるだろうか。想いを馳せながら、絵の具を入れた箱の引き出しを開けた。

中に入っていたのは、ゴミだった。

平成23年度
最優秀・優秀作品

一般の部
　テーマ「おおいたの子どもたちへ」

小・中・高・大学の部
　テーマ「私の心に残ること」

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「父の背中」

国東市　福 田 八 重 子

私は高くて真っ青な故郷の秋が好き。今日は久し振りに墓参り。「少し、うれしい話があるので来ましたよ、お父さん」

父が亡くなって、早８年目を迎えようとしている。働き者で頑固で厳しかった父。他人に迷惑をかける事を極端に嫌った。酒にもたばこにも縁が無く、人との交わりをもあまり好まなかった父。人生で何の楽しみがあったのであろうかとふと思う時がある。そして、又、仕事一筋の父は子どもと触れ合う時間もあまりなかったような気がする。

父の朝は早かった。暗いうちから農作業に出る。ひと仕事終え、一度家に帰り、朝食をすませると又、すぐ出る。 忙しい時期になると母も朝早くから外に出て家にいない。子どもだけで朝食を食べ、自分で弁当を準備する。学校から帰っても誰もいない。テーブルの上に「山の上の畑に草取りにおいで」「野菜畑のナスを取って夕食のみそ汁を炊き」など、メモがいつも置かれていた。私は学校から帰るとそのまま、畑に急ぐ。夕方は食事の準備があるので頼まれた畑仕事を先に終わらせなければならない。その当時、どこの家の子ども達も学校から帰ると家の手伝いをした。弟たちも牛や豚の世話から風呂焚き、台所への水運びなどそれぞれに任された仕事があり、夕方はみんな忙しかった。あたりが暗くなり、父が仕事から帰る頃、決められた事が出来ていないときつく叱られる。その時の父の目はこわかった。大きい声も恐ろしかった。ある時、友だちとの約束をやぶり、父にばれた事がある。注意する父の声はいつもより大きく、荒っぽく聞こえ、私は泣き出してしまった。今、思えば不器用な父のしつけであったのであろう。そんな事があってから私にとって父は怖い人というイメージが心の中に焼きついてしまった。

父は勉強よりもそれぞれに与えた家の仕事が出来ていない時叱る。時々、手も出た。しかし、小学校５年生の時、ある一つの出来事がきっかけで私の父に対する気持ちが変わっていった。まだ、寒さが残る４月。私は深夜、高熱と激しい下痢でぐったりなってしまった。苦しむ私を疲れているであろう父は背中に負ぶって、昭和20年代、まだ車など無い時代、坂の多い山道を一時間程かけて歩き、隣り村の医者まで連れて行ってくれた。医者についた父は玄関を激しくたたき、医者を起こした。診察を受け、手当てされ、落ちついた私を父は又、負ぶった。初めて触れた父の背中は広くて温かかった。夜道は暗くて恐ろしかったが父の背中で安心したのであろう。いつのまにかぐっすり眠ってしまった。翌朝、起きた時、父は仕事に出ていなかった。「ありがとう」と言えないまま、その日は終わった。後にも先にも私が父の背中に負ぶされたのはその時だけだったと思う。でも、なぜか、あの怖かった父のイメージが少しずつ私の心の中で変わり始めた。

やがて、働き者の父も年をとり、病の床に伏すようになった。そんな時、母と二人で風呂に入れた。弱々しい父の 背中をながす私。子どもの頃、暗い山道を私を負ぶって病院へ急いだたくましい背中はもうなかった。いつのまにか体は小さくなり、大きな声も消えた。風呂から上がる父の両手を強く握る。でも、もう握り返してはくれなかった。働き者 の父はよく食べた。大きな茶碗でお代わりもした。その父もやがて、口から食べられなくなり、点滴になった。そして、年が明け、雪の舞う冷たい朝、89才で逝った。

私は人生につまずいた時、いつも、あなたの力をもらいます。「お父さんあなたの見守った子どもは強くしっかり生きていますよ」腰の少し曲がった母は今年88才になる。父が一年中、花を楽しめるようにと墓の周りにせっせと花を植える。久し振りに手を合わせる私の足元でききょうの花が小さく揺れた。厳しかった父と優しい母。私はあなたたちの子どもに生まれて幸福でした。ありがとう。

【一般の部】
優 秀 賞

「秋の空」

臼杵市　吉　田　道　代

鰯雲がゆっくりと風に流れていく、校庭を砂埃が通り過ぎる。秋の午後。

少し和らいだ日差しの中で、幼い日の記憶が蘇っていく。私と祖母との会話。

私がまだ小学生の頃、運動の苦手な私にとって運動会の始まるこの時季は、とても憂鬱だった。

「みっちゃん、どげいしたん？元気がねえーでー。運動会の練習は進みよんの？」

「う～ん。私、運動会は好かん！」

「どうしてね。」

「だっていっつもどべやもん！」

かけっこが苦手な私は、保育園の頃からいつもびりだった。「今年こそは」と思うのだが、なかなか上手くいかなかった。

「みっちゃん、そげーことは気にせんでいいんで。お父さんもおじちゃんもおばちゃんもみんな遅かったんで。」

「ほんと？お父さんも遅かったん？」

「そうで、みんな遅かった。でも、全然気にせんでいいんで。どべがおらんかったら一番もおらんやろ？どべの人がおるけん一番になれるんで。胸を張って走りよ。」

「どべでもいいんだ」幼い私の心の中にこの祖母の言葉は、強く響いた。

運動会当日。私は、走った。コースを半分ぐらい進み、前の友達との距離が狭まってきた。もう少しで前の友達を抜きそうになった時、私は、つまずいて転んでしまったのだ。今年もどべ。自分の順位の旗の前に座り、足を見ると膝小僧の擦り傷からうっすらと血がにじんでいた。でも、私は泣かなかった。万国旗の向こうの応援席の祖母を見てにっこりと 笑っていた。走り終えた私にとって順位などもうどうでもよかったのだ。その時の私はゴールに入ったことだけですがすがしい気持ちだった。

私にとって憂鬱な出来事となるはずであったが、祖母の言葉でそれが一転した。

「どべがいるから一番になれる」

「どべ」であることにも意味があり、役に立っている。どれだけ私を勇気付けただろうか。何をしても上手くいかない。それを笑う人もいるかもしれない。そして、それを一番恥ずかしいと思っていたのは、自分自身だったのだ。自分の無力さを見せ付けられる運動会を嫌い、終いにはどうしても早く走れない自分自身を嫌っていたのかもしれない。しかし、それではいけないのだ。何事も不器用でいつもどべの私をも「よくやったね、あなたも役に立っているのよ」と認めてあげることが大切なのだと、亡き祖母に教えられた。今の自分にそれが出来ているとは、まだ言えないが、自分自身を含め、私の周りの人に対しても理解し認めてあげられるようになりたいと思う。

５年前に祖母は他界した。三姉妹で祖母の思い出を語り合った時、一番に思い出したのが、この出来事だった。私にとってこの祖母の言葉がその後の私の人生においてどれだけ私を勇気付けていたか、その時初めて気がついた。

人は一番になりたくていつも競いながら走ってしまっている。「一番じゃなくてもいい。どべでもいい。」自分のペースで一生懸命に走ればいいのだ。結果がすべてではなく、どべにも意味があるのだ。

秋の空に鰯雲が流れていくように時もゆっくりと私の前を流れている。

【一般の部】
優 秀 賞

「東日本大震災から学ぶ ～仲間の絆～」

大分市　竹　永　祐　子

平成23年３月11日 日本を驚異の渦に包んだ東日本大震災が突如起こり、多くの尊い命を奪っていった。子ど も達は、毎日流れる悲惨な映像に何を感じ、何を考え、そして何を行動に移したろうか。子をもつ親として、今何を伝えなければならないだろうかと真剣に悩んだ。

あの日以来、メディアを通じて、また学校でも多くのメッセージが伝えられた。

「みんな、今日は学校で先生からどんな話があったの？」

そんな会話を家族でした。それから命の尊さ・当たり前の日常の幸せ、家族や友達と一緒に過ごせることのありがたさ、危険を省みず人命救助に徹する職業人としての使命感、さまざまなことを子どもたちに伝えた。どれだけ 理解できたかはわからない・・・しかし一瞬でも被災者のことを真剣に考え、人の痛みの分かる人になって欲し い、そう願った。

もう一つ伝えたいことがある。それは「人との絆・仲間との絆の大切さ」である。人とひとのつながりが希薄化している昨今、地域のつながりも薄れつつある。しかし、被災地には強い地域の絆があった。

そして、今復興に向け原動力となっているのが、まさしくその「絆」である。震災の時、人や地域のつながりが命の明暗を分けることとなった。寝たきりの夫のそばから離れることができず逃げそびれた妻、地域住民を守ろうといつまでも避難を叫び続けた役場の職員、危険を冒しながらも人命救助に徹した消防士や警察官。家族や地域を愛するが故に帰らぬ人となった。一方で、深い絆から命を取り留めた被災者もいる。津波に飲み込まれそうになった時、仕事に行っていた息子が母の安否を気遣い自宅に戻り、ようやく助かった命。そこには強い「親子の絆」があった。逃げる時はみんな一緒に声かけあって逃げた。失っていない「地区の絆」。被災地は今、復興に向かって一歩ずつ前進している。そこにもまた「つながり」が大きな勇気となり、起動力になっている。

毎年感動を与えてくれる甲子園。今年の夏は「仲間の絆」がテーマとなった。始球式を務めたのは、宮城県気仙沼向洋高校の斉藤投手であった。同校は震災の大津波で校舎もグラウンドも使えなくなった。練習ができない間、部員たちは被災地でのボランティア活動に力を注いだ。結局、宮城大会では２回戦で惜敗という結果に終わった。被災地のさまざまな想い、そして部員全員の想いを胸に、念願の甲子園のマウンドに立ち、こん身の一 球を投げ込んだ。

選手宣誓では金沢高校の石田主将が、「日本中のみんなが仲間です。私たちは精いっぱいの笑顔で全国の 高校球児の想いを白球に込め、この甲子園から消えることのない深い絆と、勇気を日本中の仲間に届けられることを誓います。」と「仲間の絆」を強調した。両者共に苦難の末に仲間と共にたどり着いた高校球児だからこそ、全国にそして被災地に感動と生きる希望を与えた。

人は窮地に立った時、人の支えが苦難を乗り越える糧となることが多々ある。誰かが自分のそばにいてくれる、誰かの温かい一言や励まし、それが大きな勇気を生みだす。子どもらには、思いやりや仲間との時間、絆を大切にして欲しい。友と一緒に苦悩や喜びを共有し、がんばり通した時に生まれる「達成感」からゆるぎない「仲間の絆」が生まれる。仲間と共に涙しなさい。苦労を乗り越え喜びにかえなさい。そして一緒に感動をわかち合いなさい。 その一瞬一瞬の刻んでいる時間が「人生の宝ものなのだ」ということを感じながら成長して欲しいと願う。

【小・中・高等学校・大学等の部】
最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

私の「家族」

佐伯市立佐伯南中学校１年　**浅　利　里　彩**

私は４才の時、母に連れられて祖母の住む佐伯に帰って来た。以前住んでいた福岡とは違い、緑に囲まれた佐伯は、体の弱かった私にとって、とても過ごしやすい場所となった。

働きに出る母に代わって、祖母が私の世話をしてくれた。私はすっかりおばあちゃん子になっていった。祖母と一緒に近所を散歩するのが日課だったのだが、その途中で会う近所の“おばちゃん”達にもかわいがってもらえるようになった。まだ友達のいなかった私は、おばちゃん達とおしゃべりするのが楽しかった。

小学校低学年の時、通学路の大通りで安全確認をあまりせずに危険な横断をし、ひやっとしたことがあった。しかし、無事に渡れたので、特に気にとめていなかった。その夜、私は母と祖母に厳しく叱られた。その恐さに 泣いてしまったが、ふと「なぜ知っているんだろう」と不思議に思った。が、謎はすぐに解決した。いつもかわいがってくれるおばちゃんがその現場を見ていて、母に報告していたのだ。母は言った。

「おばちゃん、『心臓が止まるかと思った』って、本当に心配してくれてたよ。悪いことはできん。近所の人達が見てるからね。」

福岡では同じ団地に誰が住んでいるのかも知らないほど、近所付き合いはなかった。そんな私達親子にとって、自分の子どものように心配してくれる近所のおばちゃん達の存在は、ありがたかった。「いつも誰かが見ててくれる」と思うと、安心できた。

そんなおばちゃん達との思い出が、もう一つある。それは地区の盆踊りの練習だ。踊りは大変難しかったが、おばちゃん達はさすがに上手だった。子どもの噴から踊っている人もお嫁に来てから覚えた人もいた。おばちゃん達に敢えてもらいながら、私もその伝統の中にいるのだと思い、嬉しくなった。

踊りの一つに扇子を使うものがあったのだが、私はいつも自分の安扇子を使って練習していた。練習を重ねるにつれ、どうにか踊れるようになった私に、一人のおばちゃんが、

「これをあげるから、使って。」と、銀箔の付いたきれいな扇子をくれた。なんだか踊りの認定証をいただいた気分になった。あの嬉しさは忘れられない。

孤独死のニュースがあとをたたず、近所付き合いの薄さが問題となっている現代。そんな時代だからこそ、私は自分を育ててくれた近所の人達の愛情に感謝せずにはいられない。下校途中に会えば、「お帰り」「ただいま」が当たり前のあいさつとなっている。つまり地区全体が一つの「家」なのだ。

私もいつか、この「家」を巣立っていくだろう。その日まで、そこに住む「家族」を大切にして過ごしていきたい。盆踊りにも毎年欠かさずに行こうと思う。あの大切な認定証を持って。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「私の心に残ること」

大分市立住吉小学校６年　藤 本 真 理 乃

「まり、バイバイ。」

私は去年の10月、５年生の時に福岡県から大分県の小学校に転校することになりました。県外という遠い所なので、福岡の親友とはなかなか会うことができなくなりました。

親友の鈴菜(すずか)ちゃんとは４年生、桃花ちゃんとはようち園の頃から友達でしたが、５年生の遠足の時一人だった私をグループに入れてくれたことをきっかけに親友になりました。交かんノートをしたり、いつでも三人いっしょで、そういう毎日がとても楽しかったです。私はこんな日がずっと続くと思っていました。

ある日、転校するかもしれないとお父さんから言われました。その日私はとても落ちこんだのを昨日のように覚えています。次の日、二人を見るととても悲しくなりました。ずっと二人といっしょにいたい。私の心の中に悲しい気持ちがあふれました。

そして10月に、大分県に転校することが決まりました。でも、私はすぐに鈴菜(すずか)ちゃんと桃花ちゃんには伝えませんでした。さよならを言うのがつらかったからです。それがある日、二人に転校することを伝えることにしました。きっかけは鈴菜(すずか)ちゃんと私のちょっとしたけんかでした。けんかを原因にあまり口をきかなくなってしまい、このままでは転校する日までずっと気まずいままになってしまうと不安で、私は手紙を書くことにしました。転校すること、今までの思い出、私の言いたかったことを全て書きました。ノートを破って書いたので、気持ちが伝わるか心配でしたが、返事が来た時はうれしかったです。でも、その内容は「今までありがとう。住所とか教えてね。」と一行だけで、私がいなくなってもさびしくないのかなと思いました。

数日後、鈴菜(すずか)ちゃんが一冊の手作りの絵本を私にくれました。絵本の中にはこう書かれていました。「私は泣きました。学校や習い事で見せなかった涙を母だけに。私は決めました。まりを笑顔で送り出し、さびしかったらがまんせずにさびしいと言うことを。」私はとても感動しました。私のためだけに作ってくれた絵本。これは私の宝物の一つとなりました。

学校での最後の日、二人だけでなく多くの友達が私に声をかけてくれて、とてもうれしかったけどさびしい気持ちがどんどん大きくなっていくのが分かりました。

「まり、バイバイ。またね。」

二人はいつもと同じように笑顔で送り出してくれました。いつも口にしている言葉なのに、こんなに悲しい言葉になるとは思いませんでした。

今はなかなか会えないけれど、おたがいの様子を手紙でやりとりしています。手紙でも二人の気持ちが伝わってきます。ありがとう。大切な大切な私の親友。ずっとずっと大好きだよ。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「おばあちゃんの書」

大分県立大分豊府中学校３年　田　﨑　萌　亜

私の祖母は80歳。病気がちで、大分、よぼよぼですが、趣味は書道。若い頃からずっと続けているそうです。祖母は、よく大会等に出品し、入賞することもあったりと、とても字がうまいです。

これは、ついこの間のことです。祖母は『県美展』というのに出品しました。私はそれを知らなかったのですが、私の母が新聞に祖母の名前があるのを発見しました。入選でした。私は祖母に電話しました。

「あ、おばあちゃん。入選、すごいね。おめでとう。

すると、

「ありがとう。いやー、嬉しいな。」

という、かん高い声が聞こえました。それと、「ランラララン」という陽気で嬉しそうな祖母の歌声が聞こえました。

そうして、祖母を連れて、県美展に飾られてある、祖母の書を見に行く日になりました。入賞や人選した作品は県立芸術会館に飾られているのです。祖母はよぼよぼしているので、一緒に歩くときは、いつも私が、手をしっかり持ち、支えています。ゆっくりと歩いてあげて、気をつけてあげないといけないから、大変だけど、私はなんだか、それが好きです。

祖母を支えて、一緒に歩きながら、いろんな作品を見ました。そして、祖母の書がありました。それは、

孫たちの
精一杯の
努力の
成果が
博わって
八十歳の
私は倖せ
一杯

という、力強い書でした。支えがないと歩けない祖母が、私と妹への愛にあふれる作品を頑張って書いてくれたんだと思うと、胸のあたりがじーんとし、涙があふれそうでした。私はなぜ、祖母の手を引き、歩くのが好きなのか、分かりました。それは、祖母からの愛が伝わるからです。私のことを愛し、頼ってくれているのが伝わるから好きなんだと思います。電話をしたときの、いつものあの声には、私達の声が聞けて嬉しいという気持ちが表れているんだと感じました。

私は今まで、勉強の忙しさを理由に、あまり会いに行かず、電話もあまりしていなかったのですが、これからはもっともっと、祖母に優しくして、私からの愛も伝わるようにしたいです。

最後に、おばあちゃんありがとう。大好きだよ。これからも元気に、書道を続けてね。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「重度障がい者施設を訪れて」

大分県立津久見高等学校２年　高　野　倫　佳

去年の11月13日。私にとって、とても貴重で忘れられない経験がありました。私は合唱団に入っています。合唱団の奉仕活動では、老人ホームや幼稚園・保育園・小学校や病院・児童福祉施設など、色々な場所へ訪ねて行きます。

児童福祉施設。ここでの体験は今でも忘れられません。いつものように、バスに揺られてついたのは、『恵の聖母の家』という重度の障がいを持った人が利用している施設です。私以外の団員は二度ほど訪れたことがあり、「今回で三回目だよ。」と言っていました。しかし私は、その時が初めてでした。バスの中で、『重度』といわれる人たちが一体どんな人たちなのか、想像していました。

私は、利用者さん達の部屋へ入っていきました。まず、目が会った人は、手足が曲がっていて、今にも飛び出しそうな目で私をにらみつけ、何かを叫んでいました。

目・耳に続いて鼻。自分の立ち位置につき、さっきまでの怖さが和らいできた時、ものすごい臭いが鼻をつきました。クラクラして、リハーサルの時にキレイな印象を持った部屋の空気の変わり様に、私は驚きました。

きっと強ばった顔のまま、うたっていたと思います。だいたいのいつものパターンで、まずうたっているのを聴いてもらって、それから利用者さんの中へ入って一緒にうたうことになりました。

私は二人の利用者さんにつきました。一人は、ずーっと別の方向を向いていて、私の方を見てくれませんでした。もう一人は、ずーっとよだれを垂らしていて、大声をあげていました。

うたい始めてもその状態が続いていました。どうしたらいいのかわからなくて悔しかったのと同時に、「もしかしたら、うれしかったり楽しかったりするから、その感情を私に伝えてくれようとして、何か訴えているのではないか」と思うと涙があふれてきました。そうやって、どうにか伝えようとしていることが私はわかってあげられなくて、「汚いから」と利用者さんの手を取ろうともしなかったし、そういう気持ちを見抜いているから、「そっぽを向いたままなんじゃないか」と考えました。

まだ少し怖かったけど、思いきって手を取りました。すると、本当にこっちを向いてくれました。よだれも思いっきり付いたけど、うれしい気持ちの方が大きかったです。そして、耳元で大きな声でうたっていると、反対に私の耳が利用者さんの口元に引っぱられて小さな声で何かをつぶやきました。はっきりと言葉にはなっていないけれど、確かに「ありがとう」と伝わってきました。

胸がとても熱くなりました。「ありがとう」というたった五文字の言葉で涙がでてくるなんて思っていませんでした。

自分の感情を素直に出せるための、言葉を持っているのに、それを表さないことは、とてももったいないと思ったし、その為の知識や身体を持っていることにすごく感謝しなければならないと思いました。家族をはじめ、先生・友だち・合唱団の仲間・その他今まで私に関わって来てくれた方たちに感謝します。

「ありがとう。」

そして、これからどんな人生を送るかわからないけど、これから関わる方々。

「どうぞよろしくお願いします。」

平成24年度
最優秀・優秀作品

一般の部
　テーマ「おおいたの子どもたちへ」

小・中・高・大学の部
　テーマ「私の心に残ること」

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「いじめられっ子だって」

臼杵市　吉　田　道　代

子どもたちの様子を見ていると私はどのような小学生だったのだろうかと思い出してみることがある。決して勉強ができる方ではなかった。授業中先生に当てられて発表もできず、真っ赤になり長い時間立たされたこともあった。そのような子どもがどのように成長していったのだろうか。

幼い頃の私は、いじめられっ子だった。小学校に入学してから小さな嫌がらせを受けるようになった。４年生になる頃には、理不尽な言いがかりを付けられたりするようになり、いつしか集団でのいじめへと変わっていった。暴力を振るわれたこともあった。

そのような私を助けてくれたのは、担任の先生だった。祖母に言われて私は、勇気を出し先生に暴力を受けたことを話した。先生は、グループのリーダーを呼び出して注意してくださった。しかし、そのようなことでいじめが終わるはずはなかったのだ。私はいじめっ子に、先生に告げ口をしたと再び呼び出された。普通だったらきっと怖くなり諦めるのであろうが、私は祖母の「先生が助けてくれる」という言葉を信じて、仕返しのことも先生に打ち明けた。諦めずに何度も先生に話したことで、その子は私をいじめなくなっていった。

いじめられなくなったからといって、すぐに私自身が変わっていったのではない。集団からいじめられたことによって誰も助けてはくれない、自信の持てるものなど何もないと思っていた。

しかし、そのような私にチャンスが巡ってきたのだ。学芸会の劇のピアノ伴奏。ピアノなど習ったことのない私だったが、家にあるオルガンで懸命に練習した。ピンクのブラウスに紺のジャンパースカート。ピアノの前に座った時の緊張感は今でも覚えている。今思えば、私にとってあれは、大きな一歩だった。

今年の初め帰省した折、母から私の小学生の時の通知表を渡された。何事にも消極的で、勉強に対しても意欲を持てなかった当時の私の様子が書かれていた。それと同時に、いつも私がうまく友達と関わることができなかったことが書かれていた。このような所にまで心を配り見守ってくださっていたのだ。あの時先生が、私よりもピアノの上手な子がいたにもかかわらず私を選んでくださったのは、私に自信を持たせてあげたいという気持ちがあったのだということに、今になって気付かされた。

子ども同士の単なるトラブルとして簡単に流してしまえば、それまでであっただろうが、その子の痛みに寄り添って、その子の力になってあげたいという先生の思いがそこにあったのだ。先生を含め周りの大人がその子の苦しみを自分自身の苦しみとしてとらえるならば、見て見ぬ振りはできないだろう。

今、理解できない苦しみを与えられている子どもたちへ。助けを求めることは、何も恥ずかしいことではない。親に心配をかけるからと何も言わずに苦しんだりしなくていい。親や自分の周りの大人に、もっと甘えればいいのだ。

当時いじめられている私を見て「かわいそう」と言ってくれていた友人がいたそうである。味方なんて誰もいないと思っていた私にとって力となった。一緒に立ち向かわなくてもいい。善悪の判断が正しくつくということは、とても大切なことである。自分一人で動くことは難しいかもしれないが、そのことを周りの大人に話していれば、何か手立ては、あるかもしれない。その勇気が救いになるかもしれないのだ。目を背けないで何ができるか考えてほしい。

こうして振り返ってみると、私一人の力で乗り越えてきたのではなかった。私の周りの大人や先生、友人が気付かない所で私を見守り支えてくれていたのだ。遅くなってしまったが、みんなに伝えたい。

「ありがとう。今私は、皆さんのおかげで、胸を張って生きています。」

【一般の部】
優 秀 賞

「母から教えられたこと、母に返したこと」

大分市　井　上　杉　夫

最近、児童の虐待死やいじめによる自殺死の報道を目にします。かけがえのない命があまりにも簡単に失われてしまう現実に、私達はいつの頃から自分以外の者の痛みを感じられなくなったのかと考えずにはいられません。

私は十歳の時に父を亡くし、母は土木作業員をしながら私達兄弟を育ててくれました。父が亡くなった後の生活は経済的に若しかったと思いますが、母はいつも笑顔を絶やさず、私達に辛さを感じさせないようにしていたことが、大人になってから分かりました。経済的な事情で高校進学は難しいと思っていましたが「警察官になって人の為に働きたいので高校に行かせて下さい」と母に頭を下げました。この時も母は「何とかなるやろう」と私の背中を押してくれました。

私が進学の為に親元を離れる時、母は兄弟三人を集めてこう言いました。「これから先もしもあんた達が人様に迷惑をかけるようなことがあったら、あんた達を殺して私も死ぬからね」父が亡くなってから五年、決して苦しさを見せなかった母の覚悟をその時に知りました。そしてその時から、私の歩むべき道をはっきりと心に刻みました。

警察官になって七年後、私は千葉県にある成田空港の警備に従事することになりました。成田での任期は一年でしたが、前年に警備中の警察官にけが人が出たこともあり、普段は気丈な母も「あんたが行かんといけんのかい」と不安を隠しませんでした。当時は携帯電話もなく、任期中は母とも殆ど連絡が取れませんでしたが、無事に任期を勤めて大分に帰ってくることができました。

それから五年位が経ち、実家に帰省中のある日、母が何気なく「交通事故の後遺症が悪いがなあ」と言ったのです。母が事故に遭ったなど初めて聞くことだったので驚いていると、私が成田にいる頃事故に遭ったものの心配させまいとして知らせなかったというのです。それを聞いた時、自分でも思いがけない感情がわき上がり母を怒鳴りつけてしまいました。「事故を知らせんかったちゃあ何事か。俺は親父の死に目に遭うちょらん。あんたにもしもの事があったら親父に合わせる顔がねえ。親子兄弟に心配かけんで誰にかけるんか」母に対して生まれて初めて声を上げながらも、母の苦労と思いが分かるだけに、私は涙が溢れ顔を上げることができませんでした。

この時以来、私は自分から母に心配をかけることにしました。持病の喘息で発作が出たことも、柔道のけがで後遺症が残ったことも全部話しました。そうすれば母も私に心配をかけやすいと思ったからです。それともう一つ、自分の誕生日の朝母に電話をするようになりました。「おはようございます、今日誕生日です。僕も家族も元気です」その電話を受けた母は、私が仮死状態で生まれたことや小児喘息の発作で夜中に何度も病院に連れて行ったこと等を話します。去年と同じ話を、一昨年も話した事などまるで 覚えていないかのように話します。その話を私は、毎年初めて聞くように相づちをうちながら聞いています。

高校三年になる私の一人娘は、パティシエになる夢を叶える為に来年大阪に出る予定です。その娘に私は、ボケとつっこみができるようになることと、誕生日の朝に母に電話するようにと書いた手紙を渡しました。電話の相手が父親でないのはちょっと弱気かなとも思いますが、娘もまた、その電話を通じて親の思いを知り、命の大切さと家族の絆を忘れずにいて欲しいと思います。そして私には、時々心配をかけてくれればそれで十分です。

若い皆さん、皆さんが今生きていることには、言葉に尽くせない親の思いがあります。そして、皆さんの周りの人達も同じ思いを受けながら存在しています。どうか人に迷惑をかけず、家族の絆を大切にして信じることで、豊かな人生を築ける大人になって下さい。

【一般の部】
優 秀 賞

「子供達の豊かな成長のために」

日出町　田　北　善　子

先月大分に住んでいる長男の孫２入が帰って来て、仏壇にお参りした時の事、台所にいた私に、
「おばあちゃん、ひいおばあちゃんに、御飯とお茶とお水をあげてください。」
と駆け寄って来ました。その仕草のかわいいこと。今年４月に亡くなりました義母が生きていたら、どんなに喜ぶだろうと目頭が熱くなりました。義母との同居生活は37年でしたが、義母は神仏や先祖をとても大切にする人でした。朝一番、炊き立ての御飯を御仏飯として供え、「上げん罰より、下げん罰」と、供えたらすぐに下げ、それを自分の朝食や昼食の足しにと、一粒一粒の御飯をそれはそれは大切に食べておりました。亡くなる前には認知症を患いましたが、最後まで神仏にお参りをすることは忘れませんでした。この義母の後ろ姿から、祖先を大切にするという「目に見えなくても、人として大切なものを大切にする心」を教えていただきました。

今から32年前、結婚して５年目に、交通事故で主人を亡くしました。残された子供は、４歳、２歳、生後34日の３人。これからどうする事が主人や両方の両親が喜ぶだろうかと何度も考え、年老いた主人の両親を自分の親と思い、３人の子供達が父親の事を忘れないよう育てていこうと固く決心しました。このような気持ちで子供達と接する中、朝夕仏壇の前で手を合わせながらあいさつし、人様から何か頂いた時には、「お父さん、これもらいました。開けてもいいですか。」と報告する事が、自然と身につきました。

当時４歳だった長男も結婚し、２人の子供に恵まれ、数年間県外で過ごしておりました。その頃長男の嫁が、
「お義母さん、お義父さんの写真をくれませんか。マンションの部屋に飾って、家族でお参りをしたいのですが。」と言ってくれました。私はとても嬉しく、主人のとっておきのいい顔の写真を探して、嫁に渡しました。それから現在まで、家族４人で亡き主人の遺影に毎日御飯とお茶、お水を供え続け、お参りを続けてくれているからこそ、孫２人が先月のような行動をとってくれたのだと、改めて長男夫婦へ「大切な心」が伝わっている事に、有難い気持ちになりました。

昨年の東日本大震災の折、多くの方々が津波被害に遭われました。このような記事を新聞で読みました。若い御主人が、奥さんと子供さん２人を津波で失い、自分だけが助かった事で自分を責め、悲しみにうちひしがれていた時、その方のお母さんから「あなたが生き残ったという事は、嫁も孫２人も、御飯を下さい、お茶、お水を下さいとは言わないけれど、毎日毎日あなたが御飯をお供えし、見守り続けていく責任があると思うよ。」と言われ、生きる気力を見出したのこと。その奥深い言葉に触れ、私は涙が溢れてとまりませんでした。

今夏義母の初盆を迎え、先祖の霊をお迎えする仏壇には、古くから伝わる胡瓜で作った「馬」と茄子で作った「牛」をお供えしました。これは「馬に人が乗り、牛に荷物を載せる。」「先祖の霊がこの馬に乗って早く来て、牛に乗ってできるだけゆっくり帰って欲しい。」との願いが込められているという事です。初盆を無事終え、今こんなに穏やかな気持ちで毎日過ごせるのは、亡き義母がたくさんの苦難を乗り越え、家族を支えてくれたおかげと思わずにはいられません。

10月２日には、亡き主人の三十三回忌の法要を迎えます。これまで、先祖代々誰が欠けても今の自分が存在しなかった事を思いますと、改めて先祖に感謝の気持ちを抱かずにはいられません。亡き義母が残してくれた、たとえ目に見えないものであっても「先祖を大切にするという心」を、子供達や孫達に伝えていきたいと思います。

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「バリアフリーな人付き合い」

大分県立大分豊府中学校３年　**岡　本　夕　佳**

高校野球の大会が始まる時期になると、ふとある友人のこと、そしてその家族のことを思い出す。友人の家族、そしてその兄のことだ。この人たちとの出会いは、私に欠けていた、人付き合いとは何かを教えてくれた。

その友人の兄は、いわゆる「逆子」だった。出産時に脳性マヒと診断され、周りの介護が必要な生活を生まれながらに強いられることになった。その子育ての始めの頃は、大変な苦労をされたとの話を友人から聞いたことがあった。

初めて私がその友人の家に遊びにいったとき、表情は出さなかったものの、内心かなり驚いていたことを覚えている。初対面の際、二足歩行ではなく、車イスでの動きならまだしも、どちらかというと這うようにして近づいてきたときは、自分がどのように対応してよいのか焦ってしまった。私は肩に手をのせられた時、ひょっとしたら後ずさりしてしまったかもしれない。

もちろん、友人からいきさつを聞き、私も頭で理解したものの、感情面で受け入れるには時間がかかったのも事実だった。

その人と近づけたかなと思えたきっかけは、その兄が近所の子どもたちの野球の審判をやっている姿を見かけたときだった。何気なく友人と歩いていると、友人の兄が車イスに座り、的確に、生き生きと判定をやっていた。その周りで一生懸命にやっている子どもたちだけでなく、その兄もいつもよりずっと楽しげだった。まるで一つのチームのような雰囲気だった。そんな屈託のない活動の様子を見ていると、自分はいったい今まで何と余計な考えにとらわれていたのか、とがく然とした思いだった。

当時、「偏見」という観念は全くなかったと今でも信じているが、何らかの「違い」を必要以上に意識して向かい合っていたのだということに気づいた。「自分たち」などと自分勝手なカベを築いていた。でも実際には思い込みだけで違いなんてそもそもないものなんだ。そう気づいた時、自分の周りの視界が広がるんだと感じた。

それからというもの、以前にも増して野球自体にも興味が出てきた。もちろんもともと好きではあったのだが、バリアフリーな人付き合いを私の目前で示してくれたスポーツの存在が気になり始めた。よく世間でいう「スポーツには国境がない」というフレーズ。その言葉は私にとっては、国レベル等の広く遠い存在ではなく、もっと身近で隔たりのない人間関係を築く「カギ」となった。今でも何か世間で人権問題や文化摩擦などを目にする度に、自分の頭の中にひとりでに浮かび上がってくる行動基準となっている。

あとで聞いた話だが、その友人の親御さんは友人の兄のことを事あれば、「才能もあり、誇りに思っている」と家族内でも話をするとのことらしい。学校外の、家族という小さな単位での、すばらしい人間教育が身近にあることを、私はどこかうれしく思っている。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「骨折に気づかされたこと」

日田市立若宮小学校６年　本　川　茉　奈

私の住む日田市には、観光祭という祭りがある。音楽パレードには、市内の小学校が出て、もちろん私も出る。だが、その２日前のことだ。うんていで遊んでいた私は、うっかり手をすべらせ、うんていから落ちたのだ。しかも、その時、手をついてしまい左手首を骨折。がっかりだ。２日後は、パレードなのに。

次の日、学校へ行くと、私をみてまず、

「あー…。」

と、いうような言葉をみんな言う。先生も、

「明日は、どうする？」

と、私の不安を大きくする様なことを言う。それは、私だって骨折して出る事は、無理だと思っている。だって私のパートはバトンなのだから。ふつう、すべてを片手ですることは、できないと思うだろう。私は絶望していた。

そんな時、お母さんが、

「できる所だけでも片手でやればいいやん。左手で回すところは、オリジナルのふりつけを作ったらどう？」

と、言われて、私は納得した。でも、少し、はずかしい気もした。だけど、納得して、出る事に決めたから、みんなに追いつこうと思い、必死で練習した。

心配してくれる友達に、私はきっぱりと、こう言った。

「片手で出る。」

いよいよ本番当日、若宮カラーの若葉色ユニフォームを着て、市役所へ出発する。もちろん、パレードに出るみんなで行く。他の学校の鼓笛隊が見えると、ドキドキしてきた。でも、一番は、骨折の心配だ。

そして、私たち、若宮小学校の出番。と、思いきや一番最後だ。私は、他の学校が次々と出発する中で、すごくドキドキしていた。一番最初の学校から、1時間ぐらいたつと、とうとう私たちの出番だ。出発地点に用意して、いよいよ出発だ。道に出ると、

「かわいそう。」

と、言っている声が聞こえる。私を見ると、みんな言う言葉だ。だから私は、

「どうせ言われるなら、最後までやり切ってみせる。」

と、いう気持ちになった。でも、言うのは勝手だが、言われる側は、とても傷つく事に私は気づいた。

そして、パレードが終わると、学校に帰る。その途中で、学校で、みんな私を助けてくれた。だから私は、困っている私を助けてくれる友達がいる事にも、気づいた。他にも私をはげましてくれた。応援してくれた。手伝ってくれた。

骨折することは、いいことではない。でも、骨折した事で、周りの温かさ、ちょっとした言葉で傷つくことに気づいた。そして、周りの人に、ある意味、骨折にも、感謝している。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「福祉の現場で考えたこと」

大分県立野津高等学校３年　長　野　裕　貴

私は高校で福祉を学んでいる。高校では、３年間で60日という施設実習の授業がある。その現場で、様々なことを経験した。

私は、父が福祉の仕事をしていることもあり、幼い頃から障がいのある方と関わることが多かった。しかし小学生の私からすると、怖い思いが先に立っていたように覚えている。高校に入ってすぐに、障がい者の方がいる施設に実習に行った。その時は普通に接することができ、障がいというのはその方の個性であり、私たちと何も変わりはないのだと実感した。

２年からは高齢者施設に行くことになっている。私は実習先の特別養護老人ホームで、とても大きな経験をすることができた。

実習先に、言語障がいがあって言葉を発することが苦手なため、自分からはあまり話すことがない利用者の方がいた。ある日、その方が牛乳をこぼしたことがあった。私はいつものように台ふきで拭いた。それは、私にとってはごく当たり前のことであり、言ってみれば条件反射のようなものだった。その時だった。いつも無口なその方が「ありがとう」と言ったのだ。その時の「ありがとう」は、学校で友達に言われるものとは違い、私に大きな衝撃を与えるものだった。

話すことが苦手なその方が一生懸命に発してくれた「ありがとう」は、福祉に対する私の考え方を変えるものになった。それまでの私は、福祉という仕事は他の人が嫌がることをさせられる、まったく楽しくないものだと思っていた。しかし、当たり前のことをするだけでとても感謝してもらえるこの仕事は、やりがいのある楽しい仕事だと思えるようになった。

その反対にリアルな介護現場の実態も目にした。人手が十分とは言えず、まず素早さが求められる現場では、介護の方法に疑問を持つような場面もあった。ある認知症の利用者の方との出会いは、特に印象に残っている。その方はトイレに行ったすぐ後に、「トイレに連れてって」と叫ぶのだ。認知症のためトイレに行ったことを忘れているのか、排泄に不安があってそういう行動につながるのかはわからない。でも、その方は毎日のように叫んでいた。職員さんたちはそれを聞きながらも、他の利用者の方の介護もあって、そのたびに声かけに行くわけにもいかない。10人近くの利用者の方を２、３人の職員で対応しなければならないのだからそれは仕方がないのかもしれない。そう思っても、その方の叫び声を聞くと、とても悲しかった。それと同時に、自分が何もできないことがすごく悔しかった。自分の技術が足りないことや「実習生」という立場がひどく悔しかった。

私は高校で福祉の良い面を知り、逆に厳しい現実も経験した。福祉の仕事に就く人が多ければ、こんな問題は起こらないのではないかと思うことも多い。私はこれから福祉についてさらに専門的に学ぶつもりだ。介護実習での経験を元に、様々な制度などを詳しく知ることで利用者の方やその家族のサポートができるようになりたい。

私は今、施設ではなく在宅で最期を迎えたいと思っている。住み慣れた所がいい、というのももちろんだが、施設で暮らすことへの不安もあるからだ。そんな考えを持つ人は少なくないのではないかと思う。そんな不安があるからこそ、将来は高齢者が安心して暮らせる地域や、介護する家族が安心して頼ることのできる施設を作りたいと思っている。そして、将来自分が年老いた時に、「施設で最期を迎えたい」と思うようになるのが私の夢である。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「ひとりだけの卒業式」

大分県立芸術文化短期大学１年　三　浦　　楓

これは少しだけ昔のこと、僕の心に残り、忘れられない思い出だ。

高２の秋、僕は体調を崩して学校を休みがちになっていた。とまらない頭痛、夜はほとんど眠れない。頭痛と不眠に悩まされ続けてひとつきがたった頃、僕は病院で自律神経失調症と診断された。受験や家族や学校の周りの人間とのうまくいってないことによるストレスが原因だった。成績は高校生になって全然伸びなくなり、家族とは成績や進路のことで揉め、僕は周りの人と仲良くなるのが苦手だったから高校ではあまり友達ができず孤立していた。修学旅行には参加したが、みんな楽しみにしていた高校行事最大のイベントは、僕には楽しめなかった。

修学旅行も終わり、本格的な受験シーズン。僕の気持ちはどんどん弱くなっていった。授業に出ても全然わからない。頭痛と不眠は相変わらず治らない。周りの人はどんどん先へ進んでいるのに自分だけ取り残されているような感覚。僕のストレスや不安は日々積み重なっていった。

冬休みが終わった頃から以前にも増して人が怖くなり学校へいけなくなった。周りからは甘えているだとか仮病だとか言われて本当につらかった。みんなと同じように学校に行けない自分が嫌いで仕方なかった。毎晩、次の日は学校へ行こうと決意しても次の日の朝になると学校が怖くなり、トイレで吐き続けていた。日に日に自分が嫌いな気持ちは強くなり、自分を傷つけはじめた。

そんな生活がひとつき続いたころ、担任から電話が来た。「三浦、体調大丈夫か？」担任はとても心配してくれていた。「はい、明日は学校行きます。」僕はわざわざ電話までしてくれた先生に学校に行けないとは言えず、そう答えていた。

次の日、学校へ行った。授業を受ける。周囲からの視線が怖い、気分が悪くなり、教室を抜け出してはトイレで吐き、保健室へ逃げ込んでいた。結局その日はほとんどを保健室ですごした。

その次の日は、また学校へ行けなかった。その次の日も、その次も…

それからまた学校へ行けない日が続いた。担任から電話があり、このままでは３年生にあがれないといわれた。家族からすごく怒られた。みんな僕のつらさをわかってくれないと思った。それでもなんとか１時間フルに授業を受けることは難しくても、半分ずつ授業に出席できるように努力した。みんなが春休みの間も課題をやり続け、なんとか高校３年生になれた。

３年生になり、新しいクラス。知らない人ばかりで怖かった。けれど、担任は２年生の時と同じ先生だった。授業は相変わらず半分だけ出て、保健室へ。学校も毎日行くのはつらくて、保健室登校の日が増えた。学年が上がっても全然よくならなかった。夏には、このまま休み続けると卒業が厳しいといわれた。大学受験のときに必要な書類は、欠席が多すぎて書けないといわれた。それでも大学受験がしたい。担任が高卒認定試験を勧めてくれた。この資格をとっても高校卒業の資格をあげれるわけではないけれど、大学受験をすることはできると教えてくれた。高卒認定試験は担任に数学を教えてもらい合格することができた。

初めての大学受験、第1志望校の結果は不合格。

あたりまえだった。授業に出てなかった僕が毎日一生懸命勉強している人たちに敵うはずがなかった。

卒業式、僕は出られなかった。卒業を認めてもらえなかった。

担任が毎日電話をくれた。諦めるなといってくれた。みんなが卒業したあとも僕は補講と課題に取り組んだ。何回も諦めそうになった。何回も保健室で泣いた。それでも先生は見捨てないでいてくれた。

卒業式から１か月近くたった頃、なんとか補講と課題が終わり、卒業が認められた。生徒は僕ひとりだけ、校長室での卒業式。今までお世話になった先生方がみんな握手してくれた、僕のこれからを応援してくれた。

高校生活はつらかった、けれどこの卒業式は僕の中でとても暖かいものとして心に残っている。先生、ありがとう。頑張ります。

平成25年度
最優秀・優秀作品

テーマ　「ふるさと」

※平成25年度より「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」の
　エッセーのテーマを１つにしました。

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「第二のふるさとと呼ばせて」

豊後大野市　古　賀　深　雪

今から約四年半前、私の夫は大分市から豊後大野市に転勤になった。当時、息子が小学校入学をすぐに控えていたので、夫が単身赴任することになった。それから一年間、何度か豊後大野市の夫の家まで息子と娘と通ううちに、農村景観百選等に選ばれた美しい風景に魅了され、残る家族も翌年度から移住することになった。

家族の新しい家は、町役場から車で約十五分の場所で、窓からは美しい棚田が見える。耳を澄ますと小川のせせらぎや野鳥のさえずりが聞こえ、ふるさとのようにどこか懐かしい雰囲気がある。小学校や商店街はやや遠いが、車があれば思ったほど不便はなく、渋滞もない。約九万年前の阿蘇の噴火によるといわれる雄大な地形は、大きな懐のように新入りの私たちを寛大に包んでくれるようで、新生活への不安を取り除いてくれた。地域の方々も温かく迎えてくれ、子供の声がして嬉しいと、息子たちをかわいがってくれた。

新しい生活にも何とか慣れ、統合した新生小学校での息子の学校生活も始まった。一学年一学級で、同級生以外の友達もたくさんできた。お互いの家が離れているが、いくつかの地区で集まって、夏には近くの川に泳ぎに行ったり、冬にはクリスマス会をしたりと、家族で仲良くさせてもらった。家に居ながらにして野鳥の観察ができたり、夜には満天の星が見えたり、近所のお寺では地蔵盆やお月見会などの季節の伝統行事に参加させてもらったりと、息子たちにとっては、貴重で楽しい体験をすることができた。

そんな中で、特に強く心に残っていることは、いろいろな祭りに家族で出かけたことである。夏祭りや秋祭りの他にも花の祭りなど、町をあげての祭りもあった。農繁期の合間を縫って、受け継いでこられたのだろうと、昔に思いを馳せながら、多くの地域の勇壮な神楽や獅子舞も観てまわった。無形民族文化財として、今後も伝承されてほしいものである。息子たちは子供和太鼓クラブに所属させてもらい、祭りや地区の文化祭のステージや、高齢者施設などでたたかせてもらった。伝統芸能を近くで観たり、演奏でお年寄りの方々に元気になってもらう姿を見たりして、学ぶこともたくさんあったようである。

また、下の娘が近くのへき地保育園に通ったことも、思い出深いことである。閉園までの最後の二年間を、少人数ながらも楽しく、自然の中でのびのびと過ごすことができた。閉園式では、集まった地域のみんなで今までを懐かしみ、唱歌「ふるさと」を歌い、さびしさを分かち合い、未来へ希望を託した。ふるさとが直面する少子高齢化・過疎化という避けがたい厳しい現実をひしひしと感じた。一方で、その課題に対し、町の活性化や農業などの多方面から、ふるさとを守ろうと頑張っている人々もたくさんいて感銘を受けた。

こちらでの滞在期間もあと少しとなってしまった。息子たちはこの地や友達と別れたくないと言っているが、「いつか戻ってこられる、第二のふるさとができたんだよ。」と話している。先日のお盆も、ふるさとに帰省した人々が多く、町がにぎやかに感じた。先祖の供養や盆踊りが行われ、町内各地では松明の灯がともされた。ふるさとに老若男女が集い、一緒に過ごす時間はとても貴重に思われる。この後はまた静かな日常に戻るが、私たち家族も残された時間を大切に過ごしたい。この第二のふるさとでは、たくさんの人々との出会いがあり、かけがえのない家族共有の心の財産となった。心温かい人々がいて、懐かしい風景があって、戻りたいときに戻れるふるさとが心の中に新たにできたことは、とてもありがたく、今後の心の糧になよると思う。この心の拠り所と、美しい思い出、そして貴重な体験を大切に胸に抱きながら、次の場所でも励んでいきたい。そしてまたいつか、この第二のふるさとに家族で戻ってきたいと思う。

【一般の部】
優 秀 賞

「別府の誇れる銭湯文化」

別府市　後　藤　元　子

私は別府に生まれてから、別府で育ち、別府で暮らして50年が経った。50年間別府で暮らして一番誇れるものは「銭湯の文化」である。私が子供の頃は、町内のよほどの裕福な家でない限り殆(ほとん)どの庶民の家に風呂は無く、みんなが銭湯に行っていた。

高校を卒業して大分市内の会社へ就職したある時、私は職場で「昨日お風呂に行って…」と話しをしたら、先輩から「お前、風呂に行くんか」と聞かれたことがある。私は「行きますよ」と、「失礼な、」とでも言わんばかりに答えたが、先輩は「俺は行かん。風呂は家にある」と言った。私は一瞬その先輩を風呂嫌いの不潔な人かと疑ってしまうくらい、「風呂に行く」ことは、私の身に染み付いていたのだった。

銭湯に行けば、たいてい近所のおばちゃん達が井戸端会議をしている。優しいおばちゃんもいれば、怖そうなおばちゃんもいるが、話の内容の多くは人の噂(うわさ)話である。小さい頃から私はそんな世間話を耳にしながら風呂に入り、社会性を磨いてきた。一般的に、子供は大人に影響されやすいと思われやすいが、子供は子供なりに意外と冷静に大人たちを観察していて、「この人は、相手によって話が変わる」などはお見通しで、ちゃんとした評価をしているものだ。もっと大げさに言えば「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」の挨拶・「お天気がいいですね」「暑いですね」「寒いですね」の会話力・相手の人間性を見抜く観察力などは、銭湯という学校で実践を交えながら学んだ、といっても過言ではない。とにかく、銭湯に行けば多大な近所の情報を受け取る事ができたのである。

私が小学校から中学校にかけて新築する住宅には、お風呂がつくようになった。お風呂がある家を見て、とても近代的な家だと感心したことをよく覚えている。そうやって、町中が全員銭湯へ行く、という時代がだんだん終わっていった。

私は今、子供時代に通った銭湯からは車で15分くらい離れた町の団地に住み、いまだに銭湯に行く生活をしている。銭湯に行く時間帯は毎日だいたい決まっていて、一緒になる顔ぶれも同じであることが多い。自然と「熱い湯の時間帯」と「温めの湯の時間帯」が、暗黙のうちにできていることも面白い。私もいつもと違う時間帯に風呂に行って、いつもと違うメンバーの時には、ちょっと湯が熱いと思っても黙って入りソソクサと帰る。当然のことだが遠慮しているのだ。これもひとつの「銭湯の文化」だと思って面白がっている。

今から約10年ちょっと前、小学生の２人の息子を抱えて私は離婚した。長男はそろそろ思春期に突入する時期だったので、私は子供のことに関して何もかも自分でやろうと思わないことにした。既に今住んでいる場所にいて銭湯に通っていたので、「丁度良い。銭湯で会うおじさん達に子供をお願いしよう」と思った。

特に誰かに何かを頼んだ訳ではないが、私の思惑通り銭湯に来るおじさん達は子供達に関わってくれた。

「お父さんはどうしたんか」と普通に聞いてくるおじさん、「学校でどんな勉強しよんのか」と気に掛けてくれるおじさん、風呂に入る前に将棋の相手をしてくれるおじさん、「水を入れるな」と理不尽に怒鳴るおじさん。私が子供だった頃のように息子達も自分の目でおじさん達を観察し、良い社会勉強をさせてもらったに違いない。私は子育てを銭湯のある町でできたことに心から感謝している。

最近、家にお風呂があっても時々「スーパー銭湯」にいく人達が多い。だが、「スーパー銭湯」と地域に密着した銭湯とは、全くの別物であると私は思っている。私は別府の住民に、「ぜひ、近所の銭湯に行き、煩わしい人間関係を積極的に持って下さい」と、大声で言いたい。きっと自分の住んでいる町をもっと好きになると確信している。

【一般の部】
優 秀 賞

「ふるさとを元気にするために」

大分市　福　嶋　祐　彦

ふるさとに力がなくなっている。地域のコミュニティが力をなくし、地域の教育力が薄れた結果がここに表れているのではないか。

今、ふるさとの教育力を高めるためにできることはなんなのだろうか。

ふるさとと問われれば、幼いころの思い出に行きつく。秋の夕暮れ、こづみあげられた稲藁（わら）の山、脱穀したもみ殻を焼くいがらっぽい煙の匂い、白く漂う煙の帯。暮れゆく遠くの山々と、黄金色に輝く夕方の空。私の記憶のふるさとは、農村の景色に始まり終わる。近所の子どもたちと、泥まみれになりながら暗くなるまで遊んだ記憶は今も心に鮮やかだ。

刈り取りが終わり、広々とした田は子どもにとって格好の遊び場だった。あぜ道を走りテレビの「戦隊もの」の真似をして進んでいたとき、大きなどなり声がした。

「こらあ、何しよんのか」

顔見知りの老人だった。いつも無口で草刈りなどをしている老人のただならぬ表情に、私たちは驚き、しょんぼりしながら老人の前に並んだ。

「田んぼにとってな、畦（あぜ）は大切なものや。遊びでも畦を壊せば、来年畦塗りをして水を入れたときに、水漏れを起こすんや。水が漏れたらな、田んぼに稲が植えられんようになる。稲を植えられんとな、米を作ることもできんごとなる。わかるか」

子どもにもわかるように語る老人の言葉は、しみ込むように子どもの心に落ちた。

老人の他にも、あちこちで大人の姿があった。優しく時には厳しく接する大人たちは、私たちに地域で生きていく様々な知識を与えてくれたような気がする。学校で学ぶ知識も大事だったが、地域の人々から見守られながら学んだ事は、今も生活の中に生きている。

便利な生活を求めて、住んでいた地域を離れ都市部に移住する家族が増え、核家族化が進んだと言われた昭和四十年代。あちこちからの集まりでできたコミュニティに、地域の中にあった「見守り」は薄くなった。自治会や子ども会で、コミュニティの必要な部分は補えたが、それ以上の機能は果たせなかったようだ。

学校で子どもたちが学ぶ知識は膨大である。

将来、様々な職業を選ぶ力、職場で学び働くために必要な力、学問を探究し答えを求める力。そのような力を身につけるための知識だ。それは、必要不可欠なものであり、どれ一つをとっても、欠かすことができないものだ。しかし、地域で学ぶ力をじっくり学習する機会は少ない。

自治会の活動で、小中学生とキャンプをしたことがある。祖母山の山麓で二泊三日のキャンプだ。夕食は飯盒炊爨（はんごうすいさん）。子どもたちは食材を前に作業に取り掛かる。

しかし、火を熾（おこ）せない。ライターを使って火をつける。用意していた新聞紙は燃えるが木には火が移らない。何故も新聞紙は灰になるが火は熾（お）きない。じゃがいもの皮をむこうとする中学生。包丁の刃を自分に向けて皮を剥こうとする。

彼らは不器用ではない。学んでいないだけなのだ。木をやぐらに組み、いもの様に堅く丸めた新聞紙を中に入れ、火を付けさせるとうまく火を熾すことができる。包丁の刃を自分に向けると自分を傷つけるから、反対の方に向けるようにするとよいと言うと作業を始める。要は学んでいないだけなのだ。

ふるさとの教育力を高める策がここに見えてくる。地域で教える知識を、地域の団体と学校が協同して教えることで、子どもたちは生き生きと育つのである。

公民館主催のキャンプ体験事業、NPO法人主催の「水辺の楽校」など、多彩な取り組みが行われているが、まだまだ学校と連携しての取り組みは多くない。学校に連携用の要点を配置して、地域との連携を強化することで、ふるさとは元気になることができるだろう。その日が来るのを夢見たいものである。

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「六ヶ迫」

大分県立大分鶴崎高等学校２年　**木　村　カロリーナ　り　え**

入道雲が浮かぶ空。クーラーの効かない車の中で、私は窓から腕に落ちてくる日差しを見つめていた。風は一瞬だけ吹き、葉を揺らして少しの涼しさを置いていく。さざ彼のような蝉の声を聞きながら、車は六ケ迫に着いた。私は夏の暑さに浸った。母はこの六ケ迫の水が好きだ。ようやく就けた仕事である化粧品セールスをしている中で、最近 顔なじみとなった人から、ここの水を勧められたそうだ。健康にいいのだと、嬉しそうに言っていたのを覚えている。

父と別れて、まだ幼い姉と私を、異国人の母はその手だけで育ててきた。父から生活費は望めないし、この日本に身寄りもない。二児の母でありながらも、私達の手を握るその手は、とても頼りなかった。毎日毎日が貧乏続きで、豪勢な旅行なんかできない。週末はよく、母は私達を六ケ迫へ連れて行った。

家を出て十五分程で、田んぼの中を進みだす。山を上り鬱蒼とした緑の中を通ると、車が一台しか通れない道に出る。澄んだ水の流れる川が左側に、伸びた木々や露出した岩肌が右側に見えた。木々が頭上に天然の屋根を作り、この道はいつも優しい暗さを帯びていた。涼し気な木陰の中を進むと、ぽっかりと明るい場所に出る。そこが、六ケ迫だった。

階段を降りて木製の小さな橋をギシギシ鳴らして渡ると、目の前に仏様が見える。横に丸い井戸があって、傍に柄杓が数本置いてある。後ろには小川が流れ、水が日差しでキラキラしている。母はいつもその井戸から水を掬い、ペットボトルに入れていた。その水は鉄っぽい味と炭酸が特徴的で、お茶を薄めたような茶色をしている。体によくても、そんな水を子供だった私と姉が美味しいと思うわけがなく、姉は一度口にしたきりだった。幼い私は、姉への対抗心と大人ぶりたいのも手伝って、あえて飲んだものだった。神妙な面持ちで柄杓に口をつける私を、母は歯を見せて笑った。今思い出すと、幼かった自分が恥ずかしいのと母の心境を思い、微笑んでしまう。

そんな週末のある日、姉が友達と遊びに行ってしまい、母と私だけで六ケ迫に行くことになった。姉がやることを何でも真似し、傍について離れなかった私は、姉が自分を置いて行ったことが悔しくて寂しくてならなかった。機嫌を悪くした私は、六ケ迫に着いても仏頂面で、母に車で待つと言った。母は何度も私を誘ったが、動かないので諦めて肩を落とし、気をつけるように言うと、井戸へ向かった。車に残った私は、眉を寄せて窓から見える風景を見ていた。照りつく太陽の光でどこも輝いて見えた。車の中は熱く、背中や首を汗が流れる。ジージーと鳴く蝉の声が楽しそうに聞こえて、私はじわじわと悲しくなっていった。ここに今私は一人だけ。泣きたいのを我慢して車のドアを開け駈け出した。転ばないよう気をつけて、階段を降り橋を渡ると、私はペットボトルに水を入れる母の後ろ姿を見たのだ。

夏の日の午後。身を焦がすような強い日差しと一面に生い茂った緑の中。あの時聞こえていた蝉の声は、遠くに流れていた川のせせらぎは、窓から流れこみ私の腕に落ちていた日差しは、どんなに綺麗だったか。あの時柄杓で水を掬う母の後ろ姿は、振り返り安心したように笑った母の顔は、大雑把に結われ、日差しを反射していた母の髪は、どんなに美しかったか。私はすぐさま母の体へ飛びつき、離すまいと母の服を握りしめた。母の水に濡れた手が私の体を抱きしめる。服に染みこむ冷たさを感じながら、私はただ母の鼓動を聞いていた。母に添って私の鼓動も揺れていた。

今となっては、六ケ迫に行くこともなくなった。だが、夏の明るい日差しに照らされて蝉の鳴き声を聞くと、何かが心の中に込み上がってくる。人は、今という時に体を向けていながらも、過去の思い出が心の奥底で自分を支えていることに気づく時がある。この心の暖かさが、生きる糧になっているのだろうか。自分の道を歩まねばならない年齢である私は、この思い出を抱きしめずにはいられない。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「神楽を受けつぐ」

竹田市立菅生小学校５年　宮　本　大　輔

ドンドンチンチン…今年も子ども神楽の練習が始まった。

ぼくたちは、菅生小学校文化財愛護少年団活動として、ねぎの子ども神楽に取り組んでいる。ぼくは、五万礼始（ごほうれいし）の舞を舞っている。五万礼始は、神楽の一番最初に、火の神、水の神、木の神、土の神、金の神に、ささげるゆっくりした足はこびの舞だ。

今年も、九月に行われる「ねぎの大祭」に向けて、六月から練習を始めた。舞は、ねぎの神社の神楽座の佐藤さんに指導していただいている。夏休みに入ってからは、夜、集中して練習をした。

ぼくは、佐藤さんから、

「舞は、覚えているから、もっと自信を持って舞いよ。」

と言われた。だから、練習の時は、手を大きく広げて、しっかり前を向いて舞うように気をつけている。佐藤さんの舞は、動きがやわらかくて、やさしくゆったりしている。

「サーエイサー。」

と言うかけ声やすずの音は、太こや横笛のおはやしと、よく合っている。ぼくは、いつも佐藤さんの舞を見てまねをしていた。今年は舞を覚えたから、一人でも舞えるように練習しようと思う。

神楽座の指導者の方々は、佐藤さんだけでなく、みなさん汗びっしょりかいて指導してくださる。五万礼始のほかに、岩戸舞やしば引きの舞を一時間ぐらい、いっしょに舞いながら教えてくださる。こんなにみなさんが一生けん命数えてくださるのは、どうしてかなと考えた。

神楽座の松井さんは、六十年もねぎの神楽をしている。今も面を作ったり、ぼくたちに衣しょうを着せてくれたりする。松井さんは、

「ねぎの神楽は、二百年前から伝わっています。昔は、ご神面をつけて家々をまわり、その後を子どもたちがついて行って、とてもにぎやかでした。今は人が少なくなったけれど、菅生小の子どもたちが、子ども神楽をしてくれるから祭りがもり上がる。」

と、話してくれた。

ぼくは、神楽座のみなさんが汗びっしょりになって教えてくださるのは、何百年も伝わっている伝統を伝えてくれているのだと思った。

今年の「ねぎの大祭」は九月二十八日だ。ぼくは、りっぱな衣しょうを付ける。そして、しっかり声を出して堂々と舞おうと思う。そのために、何度も練習し、五万礼始を自分のものにしたい。それが伝統を受けつぐ事なのかなあと思う。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「あの時計」

大分県立大分豊府中学校２年　小　代　星　希

僕は小学一年生のころ、とある近所のおじいさんとおばあさんと知り合いになった。初めて二人に出会ったのは学校から帰っている途中だった。帰り道にあるスーパーから重そうな荷物を持って出てきたので、友達といっしょに荷物をもってあげて、おじいさんとおばあさんの家まで行った。そして、家にあがらせてもらったのだ。おじいさんとおばあさんは、一和さんと、ちひろさんという名前だと教えてくれた。家はとても広く、庭には池があり、鯉（こい）を飼っていた。一和さんの部屋には、数えきれないほどの時計があり、その日は、ずっと友達と一和さんから時計の話を聞いた。そしてそれ以来ずっと一和さん達の家へ行き、さまざまな事を教えてもらうようになったのだ。夕方、夕日が出ていたら次の日は晴れるということや、一和さんの持っている時計についてのこと、鯉を飼う時に注意すべき点や鯉のコンクールで優勝したことなど、たくさん教えてくれた。小学二年生になり、一和さんの家には一人で行くようになったけれど、一和さんとちひろさんはまるで祖父母のように優しかった。自分の家に帰っても、父と母に今日こんなことをした、やれこんなことを聞いたと、毎日話した。このころ一和さんの家に行くのが一番の楽しみだった。

夏休みも終わりに近い日、いつものように一和さんの家に向かった。けれど一和さんはおらず、ちひろさんだけだった。一和さんはどうしたのか聞くと、入院したということだった。信じられなかったし、信じたくなかった。前日まで普通に話していたのに…。入院した理由は前から患っていた病気が悪化したからということで、その病気は肺癌（がん）だった。今回は二回目で、前は首にあったので取り出すことができたけれど、今回は肺にあるので取り出せないらしい。それから数週間後、一和さんの家へ行ってみた。一和さんの優しい顔と声はもう僕には届かなくなっていた。亡くなったのだ。そしてちひろさんが僕に一和さんの遺書を読んでくれた。前半は身内の方々に対しての文章で、後半は僕に対してだった。もう六年も前のことだがはっきり覚えている。

「星希君、君と会えて本当に良かった。君にはもっともっといろんな事を教えたかった。けれど私にはもうできない。おわびといっては何だが大正三色の鯉の稚魚を二匹とあの時計をあげよう。君と会えて本当に楽しかった。ありがとう。私は本当に幸せだった。」

僕はその時、涙が止まらなかった。そのあと鯉を二匹と、あの時計をもらった。あの時計とは、一和さんのお気に入りで、僕が大きくなったらあげるという約束をしていた時計だ。三人で写った写真ももらった。僕の机の上で今でもあの時計は力強く動いている。そしてその隣の写真の中で一和さんは優しい顔を浮かべている。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「去っていく時間」

大分県立芸術文化短期大学１年　工 藤 明 日 香

「おばあちゃん、きたよ！」幼稚園の頃の私は、毎週土曜日になると、実家と遠くない祖母の家に泊まりに行っていた。おばあちゃん子だったため、毎週泊まりにいくことが楽しみでしょうがなく、祖母に会える前日は夜も眠れぬ程であった。

祖母の家には、ミーコという目の青くて、毛の長くまっ自でとても上品な猫がいた。当時から体が弱く喘息（ぜんそく）の発作がすぐにでる子供だったため、ミーコにあまり触るなと言われていたが、動物好きの私は誰の注意も聞かず、泊まりに行った夜は、毎回喘息に苦しんでいた。呼吸がうまくできないために、寝転がることさえもできず、眠れなかった。そんな私の背中を祖母はずっとさすってくれていた。「大丈夫、大丈夫」の声は、本当になんでも大丈夫になる気すらしていた。本当に喘息が治る気がして、涙がとまっていたのだ。祖母の愛情パワーは本当にすごいのだ。しかし、愛情パワーもむなしく、毎週日曜日の朝には病院に行く羽目になっていた。

そんな苦しい思いをしながらも、祖母の家に行っていた理由は、祖母が好きだからだけではない。祖母はいろいろなことを教えてくれた。祖母はとにかく料理が上手で、何を食べても美味しかった。その中でも、格別に好きだったのが、だんご汁。だんごを一緒に伸ばすことが楽しくて仕方がなかった。最初はうまく伸ばせなかった団子を、丸めて粘土代わりに遊んでいたのだが、うまくできると、ほめられたために集中して団子を伸ばした。分厚くいびつな私のだんごと、薄くて形のきれいなおばあちゃんのだんご。どの団子をどちらが作ったかは、一目瞭然であったが、その差も小学校高学年になると、埋まっていた。今それを思い出すと、ノスタルジックになるのは、私が少し大人になったからかもしれない。

苦しい時は誰よりも先に助けてくれ、だんご汁のほかにも色んなことを教えてくれた祖母。いつまでも一緒にいてほしいと願っていたが、そんな祖母もいつかはいなくなると、悟ったのが中学一年生の時だった。祖母は「胃がん」と、医師に宣告されたらしい。親戚が話していることで知ってしまった。しかし、私が知っていることを知らない、両親と祖母は私に黙っていた。だから私も知らないふりをした。「成人式の姿を見るまでは死なれんなあ」「ひ孫の姿見たかったわ」なんて、弱音が聞こえても「何言いよんの」と、笑いながら、祖母の言葉を聞き流すことしか私にはできなかった。それが精一杯だった。そんな言葉を聞いた夜は、祖母がいなくなることの怖さで、一人枕を濡（ぬ）らした。

しかし、それでもその時はやってきた。高校一年生の秋に病院に呼ばれたとき、もうこれが最後の時なのだと知らされた。笑顔で見送ろうと決心して、病室のドアをあけ、ベッドで眠る祖母の近くに行った。話しかけようと口を開けたが、言葉が見つからず、涙しか出てこなかった。病室の隅にあった丸イスに腰掛け、私は外の景色を見ながら泣いた。視界に入る祖母の姿には、耐え切れなかったからだ。しかし、それが今でも悔いなのだ。もっともっと、話したかったことはたくさんあったのに。家族や親戚。たくさんの人に悔やまれながら、祖母はその日この世を去った。泣いても泣いても、涙は涸れないことを知った。

ふるさとといえば、普通、両親とともに育ってきた家なのかもしれないが、私は違う。祖母と過ごしてきた時間だ。もう、祖母のいたあの時に戻ることはできないが、思い返すことならできる。天国できっと待ってくれている祖母のもとに行くのは、あと何十年後の話になるかはわからないが、成人式の振袖の姿も、私の子供の姿も全部全部、写真に収めて、祖母に見せたいと思う。しかしそれは、私が今度はおばあちゃんと呼ばれ、孫にふるさとを作ってあげたあとの話だ。それまで待っていてね、おばあちゃん。

平成26年度
最優秀・優秀作品

テーマ　「健康を考える」

※平成25年度より「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」の
　エッセーのテーマを１つにしました。

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「私にとって健康とは」

佐伯市　新　谷　良　子

健康の有り難さは、病気になって初めて気付くものである。私は、六年前、がんと告知され、長い入院生活と辛い抗がん剤治療を経験した。食事をするのも、点滴を打つのも限られたベッドひとつのスペースだけ。そこでまず病人になってしまったことを自覚する。元気な時は、時間に追われる生活なのに、ここでは流れの遅い時間を追うことしか出来ない。病室の窓から見える日常の何気ない光景や、人々の生活がとても羨ましかった。体のどこかに病気が見つかり、健康を失った時、人は色々なことを思う。

まず健康は幸せの第一歩であること。自分が置かれている日常こそ尊く、感謝して喜んで生きる場所だと知った。また、そんな日々を幸せだとか、有り難いとか思えなかった自分を反省した。私にとって健康とは、体よりも心の状態を指し、心のもち方（考え方）が常に前向きで、明るく生きていることが必須条件と思いたい。それは、心と体は繋（つな）がっているからだ。それを実感したのもこの病気からだった。

主治医から「大丈夫！」と言われれば「私の病気はそんなに進んではいないんだ」「よし、頑張って治療に専念するぞ」とやる気がおこる。明るい気持ちにもなれる。こんな心の状態の時は、血液検査にも良い数値として表れる。それとは反対に、いつも落ち込んでいたり、自分がこうなったのは、誰々の所為だと他人を恨んだり、憎んだりする人もいる。

人は、病名を告げられた瞬間から気持ちが動揺し、不安や絶望感、恐怖感にさいなまれる。しかし、否定的な感情を持ち続けていると治療や病気への取り組みにマイナスとなり、ストレスが病状を悪化させることも多い。自分がなぜ病気になったかを考えて原因を取り除かなければ、また病気をつくってしまうのだ。それは自分にしかできないことでもある。入れ替わりの激しい病室には、患者の数だけ抱えた人生が見え隠れする。幼子の登校を気遣う母親は、毎朝決まった時間に電話をしていた。定年後とはいえ、毎日妻のもとへ通（かよ）ってくる夫もいた。一人の生活が寂しいのか、自棄酒（やけざけ）を飲んでは、入院中の妻を困らせた夫もいた。三人の孝行息子に看取られて天国へ旅立った、働き者のお母さんもいた。ICUから出たら真っ先に私のところに来ると約束していたのに・・・、彼女の笑顔が今でも私の頭から離れない。家庭の中では太陽である存在の母親が健康を損ねてしまった場合、みんなの生活が狂ってしまう。笑顔が消え家庭の中が暗くなる。健康はお金では買えない。改めて健康の素晴らしさに私は気付いた

> 筑波（つくば）大学名誉教授 村上和雄氏の著書『生命（いのち）の暗号』の中に
> 「辛い局面に立たされたとき、その状況でどれだけプラス発想ができるか。
> 病気をした場合、自分にとって『よいほうへ展開する』というふうに広い視野でとらえること。つまり、自分の身に起きることは『すべてプラス』というとらえ方をすることです。人間の場合、心の持ち方いかんが環境になってくる。幸福であることも、健康であることも、すべて心から出発しているのです。」とある。

私は、この文章に励まされ支えられた。病気にならないためには、禁煙を守り塩分や肉類をできるだけ控え、野菜や果物を、しっかり摂りながら適度な運動をして、肥満にならないように努めるなど、きちんとした生活習慣を守ることも大切だろう。これからは、健康で超高齢社会を生き抜いていかなければならない。そのためには、人との出会いがあり語り合える場があること。そして、自分がときめくものを見いだし、その中から喜びや達成感を得ることも大事ではないかと私は思う。

【一般の部】
優 秀 賞

「心が健康である」

大分市　石 和 真 希 子

「いってきまーす」
「いってらっしゃい」と我が子の後ろ姿を見送り手を振る私。サブバックをかごに入れ、通学カバンを荷台にくくりつけ、自転車通学で今日もでかけていく。
「素敵な一日でありますように」と願い、大きく背のびし、自分の仕事にとりかかる。去年までは、ランドセルがゆらゆら揺れていたのに、「大きく成長したな」とひとりごと。

中学生になり思春期という時期に入り、毎日、大きな波の中でゆられながら生活しているように思う。ご機嫌のいい時も悪い時もあり、親子でけんかになる時もある。私は、ガミガミ、主人は、私と息子のやりとりを温かい目でじっと見ている。

けんかしても、部活を終えて元気に、
「ただいまー、おなかへったあー、今日の晩ごはんなーに？」と普通に帰ってくる。

やはり親子なんだなと改めて思う。

私にとって健康とは、けがや病気をしないで過ごす日々のこと、そして家族みんなの心も身体も元気なことであると考える。心が健康で元気であれば、少しの迷い悩み、困ったことに出会った時に何らかの対処ができるのではないかと思う。

心がいつも健康で笑顔であれば、相手のことが理解でき相手にも優しくでき喜びを分かちあえるようになると思う。

私は、毎日夕食時、子ども達の話を聞くのが大好きだ。その日あったこと、何でもいい学校生活のこと、通学途中の出来事、世界のニュース、新聞の話題、今日の夕食のメニュー、何でもいい、感じたまま、考えたこと思ったことを表現できるような環境づくりを心がけている。言いかえれば、家庭での会話を大切にしている。時には、その時間が長くなりすぎ、子ども達と「時間がない、宿題やらなきゃ」と大騒ぎしている私もいる。

先日のこと、「息子さん、自転車通学になったんですね」「頑張って、坂道を自転車おして帰っていましたよ」と御近所の方々から声をかけていただいた。御近所の方々に子ども達をいつも見守っていただいていると思うとありがたくて感謝せずにはいられなかった。昔は、こんなことはあたり前の光景だったが今では、珍しいことのようだ。御近所でも、大人同士挨拶しないとか聞くと、なんだかさみしく悲しい気持ちになる。みんなで子ども達を温かい眼で見守り、一緒に心身を育んでいきたいのに、住みにくい時代になったのかなと悔やまれてならない。

自分さえよければ、自分だけが楽しい思いをするのではなく、「みんなが笑顔で心身共に健康に育っていくにはどうしたらいい？」と自分自身に問いかけ考えられる人になってほしいと願っている。

これからの未来を担っていく子ども達に対して、私は、私の今までの経験を語ったり、失敗したこと、苦い経験、日本以外で見たり聞いたり体験したりしたことを子ども達に伝えていく努力をしている。いつかあなたたちの役に立ってくれることを信じながら…。

この歳になると、ふとした瞬間に、子ども時代の原風景を思いだすことがある。正確に言えば、ぱっとその場面に降りたったような感じ。その時のにおい、香り、友達までが、そこにたたずんでいて話しかけてくるような感じ。両親と行った思い出の場所での出来事。子ども時代にたくさん経験したことが、今の自分を作っているんだと思うと、人間ってすばらしいなと思う。それを温かく見守ってくれている自然にも畏敬の念を感じる。

心がいつも健康であるのは、家族、まわりの人たちに支えられ、見守られ、そして、この自然豊かな土地から力をもらっていることを改めて後世に伝えていくことが私達の役目だと思う。

【一般の部】
優 秀 賞

「百歳まで生きる」

大分市　山　本　晋　滋

80歳の私は、今までに２万９千200日生きてきた。これから100歳までは、あと７千300日しかない。

昔は「人生五十年」と言われていたが、今は「人生八十年」時代。自分の体に、心に気配りさえすれば百歳までは生きられる。これからは「人生百年」をめざして健康づくりだ。

５年前脊椎狭窄症と診断され、立つことも歩くことも出来なかった。もう寝たきりかと心配されたが、伝い歩きから始め、５メートル、10メートルと歩くうちに、今は朝のストレッチと歩行運動で人並みに行動ができている。

朝４時過ぎに目が覚めると、床の中で背伸びから始め、足を曲げ、伸ばし、折っては重ねるなど12種類の運動を、それぞれ30数えるまで続ける。約30分間のストレッチだ。

私の歩き方は父譲り。若者を次々追い越していく、早足歩き。

先日スーパーマーケットで血管年齢を測定してもらったら、53歳と出た。地域の健康測定でも体内年齢は54歳だった。いずれも若く出た数値を励みに、健康づくりをしている。

朝７時15分、国道197号線乙津橋西交差点に立ち、小･中･高校生の通学安全見守りをする。子どもたちに「おはよう」と声をかけると「おはようございます」と返ってくる。「行ってらっしゃい」と見送り、子供たちから元気をもらう。

見守りでじっと立って居る間も、つま先を上げたり、膝を曲げたり体を動かすことに気配りする。その後歩道に落ちている紙くず、空き缶などを拾い我が家に着くと、ゴミ出しが待っている。

暇なときは、我が家の庭木せん定か、団地公園の草取りである。梅雨時期になるとひと雨毎に草は新芽を出し、大きく伸びる。取っても、取っても伸び、草との競争は毎日続く。草は梅雨前に取るものと心得てはいるが、なかなかそうはいかない。草取りは手先、指先の運動と共に、頭の体操にもなっている。百歳まで生きるにはこれしかない。

夕食後は散歩。１日１万歩を目標にしているので、その日の不足分を歩く。最近は歩く途中にスロージョギングもする。週１回、妻とボウリング教室にも通っているので、その準備運動になり助かっている。

午後９時、床に就く前に今日一日の記録をする。その日の歩数、運動、便通、起床時間、就寝時間、アルコールを飲んだかなどなど、健康維持に気配りしなければならない項目をチェックするのだ。

時代の流れとして、今、「高齢者」のあるべき姿が問われている。果樹は、芽が出て葉が茂り、花を咲かせ実が完熟する。人間の体は死へと確実に向かっているが、健康でさえあれば、死期を延ばすことも可能である。人間として、過去に培った知識や技術で花を咲かせ実らせたい。それには体も心も健康でなければならない。

人生の四季は一般に「春夏秋冬」と言われているが、それは体のことで、心は「夏秋冬春」である。

80歳で健康な今は、平和な時代に生き、何でも食べられ、好きなことが出来ている。まさにこの世の春だ。

「死ぬその日まで子供の見守りを続けたい」それが私の願いです。

【小・中・高等学校・大学等の部】
最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「食は健康の源」

日田市立三隈中学校１年　**岩 下 野 乃 花**

真夏の日差しが、容しゃなく照りつける。かと思いきや大雨が降る。今年の夏は不安定な天候が続いた。でも、私はとても元気だ。その理由の一つは、毎日お母さんが栄養バランスや私たちの健康を考えて食事をつくってくれているからだろう。

「食欲」は健康に過ごすためにとても大切なものだと思う。お母さんは私たちが一日を元気に過ごせるように、朝はやくから食事を作ってくれたり、できるだけみんなの好きなものを作ってくれたり、旬の野菜を使ったり、様々な工夫をしてくれている。特に、旬の野菜には、人々がその季節を健康に過ごすために必要な栄養がたくさん含まれている。夏には夏の。冬には冬の。

でも、私は小さいころから好ききらいが多かった。今でも、焼き魚やゴーヤなど、苦手なものが多い。しかし、小さいころと変わったこともある。それは、授業などで食に関しての様々な問題と向き合ったり、小学校高学年での体験で料理をすることの大変さを学んだりした事により、きらいな食べ物でも、食べられるようにと心がけるようになったことだ。

小学校五、六年生のときには、自分で料理がしてみたいと思うようになり夏休みの料理教室へ通った。短い期間だったけれど、包丁の持ち方などの料理の基本から、食材の選び方までたくさんのことを学んだ。その他にも先生は、「一日三食が健康の基本だよ。」「夏バテしないように夏野菜をたくさん食べてね。」など健康に大切なことも教えてくれた。おかげで、小さい頃と比べ、体調を崩すことが減ったように思う。

それから、小学校の宿題でも料理をするという課題が出た。調理実習の復習をすることが目的だったが、私は先生に教わった料理をして人に食べてもらうことが健康への一歩というのを思い出しそれを考えながら作った。完成した料理を食べてもらうと「いつの間に上手になったん。」「おいしい。」など、多くの言葉をもらった。私は、気持ちを表現することがあまり得意ではない。心の中には色々な思いがあるのに、それを表現できないまま消えてしまう。でも、自分で作った料理には私の言葉が詰まっていて、それに気づいてくれた人がいる。うれしかった。そして確かに笑顔がうまれ、心と体の健康に少しでも力になったと思う。

私は、この体験から、健康に過ごすためには、食に関することの理解が必要だと思った。例えば、「いただきます。」などのあいさつを忘れないようにすることや、笑顔で過ごす事も大切だろう。そんな小さな事からでも心と体の健康につながってくると私は思う。そうして今、私が健康である事に感謝したい。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「健康について」

日田市立有田小学校６年　**中　野　和　奏**

私は健康について考えてみました。

健康とは、けがをしたり病気にかかったりせず、丈夫な体で過ごしていることだと考えていました。

そこで、何が原因で病気にかかってしまうかを考えてみました。

手洗いやうがいをしなかった時や、人ごみの中に行った時もかかってしまうけど、そればかりではなく、もう一つ、関係していると思います。それは心です。

私はピアノの発表会の前など、緊張した時や心配事がある時に、お腹が痛くなることがあります。これは心が関係しているからだと思います。

それでは、どうやったら病気が治るかを考えてみました。

病院に行って薬をもらえば治るけど、何よりも心が大事だと思います。

嬉しいことや楽しみなことがあると、治るのも早くなると思います。「病は気から」という言葉があります。気持ちの持ち方次第で病気も変わるとはこのことだと思います。

私が健康のためにしていることは、生活のリズムを崩さないようにしていることです。起床時間や就寝時間も決めています。家での食事も大体決まった時間にきちんと食べるようにしています。帰ってから友達と遊ぶ時間や、勉強の時間も決め、毎日の生活がなるべく同じような流れになるように気を付けています。さらに、病気が流行っているときは人ごみをさけマスクをして外出しています。健康であるためには、心のあり方も大事だと思うので、毎日、家族や友達と話して心が元気になるようにしています。

家族とは団らんする時間を作るようにしています。学校での出来事や、習い事の話をしています。

友達とは、遊んだり、一緒に絵を描いたりしています。何かあった時は、友達は自分のことみたいに心配してくれるので嬉しく思います。

病気の原因となる心を健康にするために、これからも家族や友達と話す時間を大切にしていきたいです。そして、友達の話も聞いて相談にのってあげて、みんなが健康であるようにしたいと思います。

高齢化が進み、みんなが健康な方ばかりだといいのですが、病気で寝込んでいるお年寄りの方も大勢いるようです。

私は、日頃の生活に気を付け、病気の予防に心掛け、毎日を明るい気持ちで過ごし、けがや病気のない、健康な一日を送れるようにしたいと思います。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「『昼食格差』と健康」

大分県立三重総合高等学校２年　大　塚　真　愛

私たち高校生の健康には、「昼食」の摂り方が大きく影響している。

中学生までの昼食といえば、「給食」だった。決められたメニューの食事を、決められた時間に与えられ、みんな一緒に食べていた。それは、栄養のバランスがよく考えられたメニューであり、４限の後に「給食の時間」が確保されていた。お菓子の持参は禁止されていたので、そのようなものが休み時間に出回ることもなく、「早弁」もあり得ない。

しかし、高校生になって、私たちの「昼食」事情は大きく変わった。給食がなくなったので、手作り弁当の人、コンビニでお惣菜を買って来る人、購買のパンを買って食べる人など、人それぞれのスタイルになった。これは、高校生になると、自分の食生活の一部を責任をもって管理しなければならなくなったことを意味していると思う。

また、食事の時間について言えば、周りの友達の中には、授業中お腹が鳴るのを防ぐために休み時間にお菓子を口にする女子や、待ちきれずに弁当をガツガツ食べる男子もいる。それも「自由」なのが高校生だ。

思えば、給食にももちろん短所はあった。

まず、量と内容に融通が利かない。足りない人、多すぎる人、どちらも不満だ。嫌いな食材が入っていても、全部食べ終わるまで絶対に許してくれない先生もいた。アレルギーのある子のために、わざわざ別メニューを用意してくれたのを目にして驚いたこともある。各自が自由に昼食を用意する高校生に、これらの問題は生じない。

また、給食は普通座席をもとにした班で机をつけて食べる。そのため一人ぼっちになる子はないが、時には気の合わない子と毎日一緒に食べないといけない場合もある。高校生はたいてい仲のいい友人と一緒だし、一人が好きなら一人で食べることも、さらには昼食を抜くことさえ「自由」だ。

こうして、中学校までの給食があった生活と今の給食なしの生活を比べてみると、高校生の昼食は「自由」度が増した分、人によってずいぶんその摂り方に「格差」が生じていることに気づく。

高校の先生方が、生徒の昼食の摂り方についてやかましく言うことはない。しかし、ここで初めて得た「昼食の自由」をどう使うかという判断は、もしかすると、私たちが大人になって一人暮らしを始め、一日三食をどう摂るか、をすべて自己管理せねばならなくなった時の姿とほとんど同じなのではないだろうか。先生方が厳しく注意しないからと言って、嫌いな野菜を全然摂らないような昼食を３年間続けてよいはずはない。

私自身、高校生になって休日も家以外の場所で昼食を摂ることが増えた。そんな私が今気をつけていることは、「なるべく食べ物は買わない」ということだ。必ず家の田んぼでとれたお米で、おにぎりやお弁当を作ってもらう。店で売っているお弁当やパンの食品表示ラベルを見ると、どれも様々な添加物が使われていて何だか不安になるのだ。

小学生の頃自由研究で食品添加物の研究をしたが、知らずに食べていたかき氷のシロップに「虫」由来の着色料が使われているのを知ってショックを受けたのを覚えている。自分が食べる物は何から出来ているのか、それ以来とても気になるようになった。

家庭科の授業で習ったような理想的な食生活を続けることは案外難しい。しかし、「食事の自由」と「自分の健康を守る責任」とは表裏一体であることを、私はずっと忘れずにいたいと思っている。

【小・中・高等学校・大学等の部】
優 秀 賞

「私の祖父と祖母」

大分県立芸術文化短期大学１年　古　園　千　紘

私には祖父母がいる。祖父はとても穏やかであまり怒らない。祖母はしっかり者の几帳面だ。私が小学生の頃、祖父母とは離れて暮らしていた。と言っても、歩いて２，３分。よく祖父母の家に行っては、姉とかくれんぼをしていた。幼い私にとって祖父母の家は、テーマパークのようだった。とにかく祖父母が好きで仕方なかった。

私が中学生になった頃、祖父母が私の家の隣に引っ越してきた。何かあるたびに、祖父母は私の部屋に来ては話しかけてきた。思春期でもあり反抗期だった私にとって、祖父母の話すことがうるさくて嫌で仕方なかった。そんなある日、祖父母が私に挨拶をしてきた。私は、ちゃんと返したつもりだった。しかし、祖父母は私の返事が聞こえなかったらしく、そのことを祖母が母に話したようだ。次の日、母に怒られた。「あんたが返したつもりでも、ばあちゃん達には聞こえんのんよ。ちゃんと大きい声で言いなさい。」なんで、私が怒られなきゃいけないんだ。ちゃんと返したじゃん。内心、とてもイライラした。そのイライラは、母ではなく祖父母。それからの私の祖父母への態度は傍から見てもとてもひどいものだっただろう。祖父母もそれに気づいたのか、あまり話しかけてこなくなった。

高校生になったとき、私の家は北部九州豪雨に見舞われた。そのこともあり、私の両親は地元を離れた場所で仕事をすることになった。兄姉が家から出て家に私だけになったので、両親は私を祖父母の家に預けた。それから夕食の時だけ、私は祖父母の家で一緒に夕食を食べることになった。最初の頃は、なんとか祖父母に話を合わせようと努力をしたが、気を使っている自分が馬鹿らしく思えた。また、私はその日習ったことの復習を夕飯前にする癖がついていたので、夕飯時になり祖父母が私を呼びに来るまでに済ませなきゃいけないというプレッシャーをかけられているような気持になり、祖父母と夕飯を食べること自体を拒否するようになっていった。「晩御飯は自分で作って食べるよ。」そう言ったときの祖父母の悲しそうな顔に少し罪悪感を感じたが、当時の私にとってはいっぱいいっぱいだった。

そんなとき、祖父が倒れた。何回か入院したことはあったので、私は内心大丈夫だろうと思っていた。しかし、深夜にトイレの前でうつぶせに倒れていたということを祖母に聞いたとき、これは大丈夫なんかじゃないと思った。祖母、母、姉と病院にお見舞いに行った。祖父は痩せて変わり果てていた。苦しいにも関わらず、私に笑顔を見せようとしていた。私が声をかけると、祖父は涙を流し、私に会えたことが嬉しいと言った。私はその時、どうして祖父にもっと優しくしてあげられなかったのだろうと思った。また、祖母に対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになった。私はその場で泣いてしまった。自分がしてきたことが、恥ずかしくて祖父母に何と言っていいのかわからなかった。それから祖父は何とか退院することができた。私は、祖父母にできるだけ優しくしようと心掛けた。時々イライラすることもあったが、私がここで怒ったらまた後悔することになると思い、ぐっとこらえた。小学生の頃のようには戻れないが、少しずつだが関係を修復できているような気がする。

祖父母と離れてもうすぐ５か月が経つ。その間に何回か祖父母のところに帰ることがあったが、祖父母は優しく私を迎えてくれ、今も私の帰りを心待ちにしているそうだ。離れて一人暮らしをしてみて、高校生のときに祖母が私の分の夕飯を作ってくれていたことの大変さを知った。今度帰るときは、祖父母とご飯を食べよう、そしていろんな話をしよう、そう思う。健康であることは大事だが、私は大切なことを祖父が倒れたことを通して気づいた。私は祖父母がこれからも元気でいてくれ笑っていてくれることを一番に願っている。

平成27年度
最優秀・優秀作品

テーマ 「読 書 と 私」

※平成25年度より「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」の
エッセーのテーマを１つにしました。

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「僕の居場所」

豊後高田市　下　山　尚　美

ある日、小学校に息子を迎えに行くと、誰もいない教室に担任と２人。息子は、机の上にナイチンゲール、キュリー夫人、ライト兄弟３冊の伝記を積み重ね、夢中となり本を読んでいた。今ではたくさんの本を読むようになった息子も最初から本が好きだったわけではない。10才の息子は、現在、特別支援学級に在籍している。

「読み聞かせ」と言う言葉を知ったのは、息子がまだおなかの中にいる頃だった。大切なことだと育児雑誌にも書かれていたけど、出産後は、育児に仕事と大忙しとなり、読み書かせどころではなくなっていた。そんな時、一つの出会いが訪れた。幼稚園に絵本の大切さを教えてくれる講師がやってきたのだ。その先生の話を聞いて、「無理でも、始めてみよう」と思い、月刊の絵本を購入する事にした。しかし、ここからが大変だった。絵本を月１回もらえる事に対しては、特別な事だと喜んでいたが、最初の半年頃までは、数行読んでは逃亡する様な状態で、なかなか聞いてはくれなかった。それどころか、ビリビリと本を破きはじめた。息子にとっては、読み聞かせよりも本を破いたりする方が楽しいようだった。

読んでも読んでも聞いてくれない息子と、聞いてくれなくても最後まで読むと決めた母の我慢比べの日々が始まったのだ。そこへ、夫も参戦。夫は、絵本を逆さ読みにしたり、関西弁にしたりと絵本で息子を笑わせた。読み聞かせが難しかった息子も、絵本に触れる事が増え、絵本があれば笑い、家族が笑った。それから少しずつ聞ける時間が長くなり、年長になる頃には、自ら５、６冊もの絵本を持ってきて、「読んで、もう一回。今度は、おもしろく読んで」とおねだりする様になった。

そんな息子も、いよいよ小学校へ入学。期待とは裏腹に絶望が待っていた。授業に参加できず、友達とは喧嘩（けんか）ばかりの日々。じっとできない息子は「学校」という縛られる環境に、ストレスを感じ、苦しみ、涙を流した。この時期息子には特性があることがわかり、自分自身をコントロールするのが非常に難しい状態であった。

息子は,何かトラブルがあると逃げまわり隠れる様になった。自分の居場所は、ここにはないと思い、校内をウロウロすることが増えた。ある日は、家庭科室の机の下、又ある日は、階段に隠れて過ごす日々が続いていたのだ。そんな中、息子が自分の居場所として選んだのは「図書室」だった。当時、私は息子が自ら本を読む姿を見た事がなく、本が読めない子だと思っていた。パニックを起こした時は、図書室で好きな本を手に取り、静かに読んでいると担任から聞き、本当に驚いた。気付くと、一日のほとんどを図書室で過ごす様になっていた。いつしか息子にとって図書室は、心のより所となっており、本のある環境が彼の一部となっていたのだ。授業に参加出来ない事も多いが、本から得る知識は多く、息子を大きく成長させてくれる。雑学王になりつつある息子。クラスメイトもそんな息子の良い所を褒めてくれる様になり、今では、担任の先生方の協力もあり、両者が歩み寄る事が出来る様になった。この事は、息子にとって大きな一歩だった。

私は思う。息子があの時、絵本と出会う事がなければ、自らの居場所を見つける事が出来たであろうか。今もまだ、探し続けて悩んでいたのかもしれない。読み聞かせをはじめて６年間。もう、私の出る幕はなくなった。今は、自ら読みたい本を手に取り、覚えた事を私に教えてくれるのだ。

最後に息子に聞いてみた。「本は好き？」すると、息子はこう答えた。「わからない。たぶん、好き」最高の答えである。

【一般の部】
優 秀 賞

「父の本棚」

大分市　朝　日　容　子

茶の花が淡く咲く初冬、父は六十一歳で旅立った。定年退職後のある日、父は母と共に私の家に来て孫たちと楽しいひとときを過ごした。帰り際、父は私に一冊の本を手渡した。表題は『花無心』。長年に亘って書き留めた随想、詩、俳句等が認められ自ら描いた曼珠沙華や茶の花など淡い色彩で添えられている。

「『花無心』って何ね？」父に訊いた。

「まあ、読んでみりゃ分かるよ。父ちゃんはこの本を書いたんで何も心残りはねぇんだ」にこりと笑い、私の顔をまじまじと見た。

その二日後、父は病を得て不帰の客となってしまう。娘の私には、それが残念でならなかった。

葬儀が一段落着いた日、私は父の部屋をのぞいた。父の温もりと匂いが微かに残り壁際に陣取った本棚に目が留まった。夏目漱石、太宰治、島崎藤村など、なかでも漱石の全集はずらりと並んでいる。余程、漱石に傾倒していたのであろう。その中の一冊を手に取り、パラパラとめくってみた。父の手垢がうっすらと滲んでいて、ぽろりと涙が零れた。（残された文学書、あと誰が読むのだろう……）文学的素養の浅い私は戸惑った。

そんな中、市の読書会の募集を知る。もしかしたらこれらの本を読み進めることが出来るかもしれないと思い、入会することにした。

読書会の会員は三十代半ばから八十代に亘り、六十代以上が七割を占めていた。当時、三十六歳の私は、この会に来れば「若い人」と呼ばれ、妙に居心地がいい。月に一冊、課題の純文学作品を読み読後感を話し合う。

最高齢の男性は、中河与一の『天の夕顔』、川端康成『雪国』等、八十代とは思えぬ程、ストイックな恋物語を提案し、瑞々しい。更に「文学は情熱を呼び起こしてくれる大切な友人だ」と言う。読書に親しむ姿勢を訊ねると「何も最初から難しい本じゃなくとも、好きな本から始める。そんうちに世界が広がり他の本も読んでみとうなるから。今一つは、読むことを習慣付けることじゃな。私は八十三になるが、毎日歩くことと読書は欠かしたことがないんじゃ」と笑顔で話す。

（ああ、若さの秘訣は、ここにあったのか！）私より、ずっと年上なのに心はずっと若い。

明治、大正の作品を読むに於いては年輩者が生き証人となって熱く語る。自らの戦争体験、当時の社会情勢、暮らし向き等、鮮烈に蘇る。単に粗筋を追うのではなく、一歩踏み込んで自らの考えを展開させていき、仕舞には人生論、人間愛、教育論にまでも及んで、「今の子供たちの問題は、親である私たちにも責任がある」と反省を込めた意見も飛び交う。爽やかな作品に心洗われ、どろどろした作品から人生の深淵をのぞきみて、自らの感性や考えを深める。それに作品ゆかりの地を訪れる文学散歩も楽しみの一つである。

思えば、戦後のベビーブームに生まれた私達は、受験も就職も全て競争の中におかれた。何につけても、ゆったりと考え、行動する余裕が無かった気がする。ところが六十六歳になった今の私は、この読書会にどっぷりと浸かって読書の楽しさを味わっている。読破した本も三百冊を越えた。文学に縁の無かった私が、広く本に接することにより読むことと同時に書くことの愉しさも知ることができた。

そして十年前、学生時代を過ごした熊本の地を訪れ、拙いながらも紀行文を書くことが出来た。その旅先で父が敬愛した夏目漱石のお孫さんにお会いできる幸運にも恵まれ、夢のような出来事となった。

のちに父が文学に情熱を傾けた証として、唯一の形見となった『花無心』の意味を調べた。（禅語で、事象にとらわれず、今この一瞬を大切に生きること）。この年になって漸く父の想いが、じんわりと胸に響いてくる。

次回の課題書は、くしくも漱石の『門』である。

【一般の部】
優 秀 賞

「『路傍の石』を再読して」

大分市　板 井 奈 穂 子

「あー、読書感想文、どうしようー。」

毎年、夏休み後半になると聞こえてくる娘の悲鳴である。娘は今年小学校５年生。御多分にもれず、読書感想文は苦手らしい。こう見えても私は、小学校５年生の時に、山本有三の『路傍の石』を読み、読書感想文を書いた記憶がある。この事を私自身、少なからず自慢してきた。５年生の時に『路傍の石』を読んだ。しかも担任の先生から「良い本を選びましたね。この本を友達にも薦めて下さい」というコメントを頂いたことは、私に大きな自信を与えてくれた。

感想文が書けずに四苦八苦している娘を横目に内心、

「どうしてそんなに書けないのか」

「もう少し大人っぽい作品を読めないのか」

「私が５年生のころは・・・」という思いがふつふつと湧いてくる。そんな思いを抱きつつ、娘に文句を言う前に一度読み直してみようと、再び手に取った。

三十数年ぶりに読み始めて、私はひどく驚かされた。それは、この作品がこんなに難しかったのか、という事である。自分は本当にこの本を読んだのだろうか、と思ってしまった程である。一つひとつの語句にしても、またこの作品の時代背景にしても、当時の私が一体どれだけ理解できて読んでいたのだろうか。ほとんど理解できずにいたのではないだろうか。今回読み返す時も、時々巻末の「注」を引きながら読まなければ理解できなかったのだから、小学生だった私は作品の雰囲気は感じていたかも知れないが、ほとんど上すべりで字づらを追っていただけだろう。これでよく感想文書けたものだと、我ながらあきれてしまった。

吾一少年が置かれた過酷な境遇も、現代とはあまりにもかけ離れているため、四十を過ぎた自分は少しは想像がつくものの、十才過ぎのあの当時、吾一少年の貧しいゆえの苦しみ、悲しみ、理不尽さ等の心情をどれだけ感じとれただろうか。ましてや今、我が娘が読んだとしてもほとんど理解できないのではないだろうか。今回、それ程の衝撃を受けた。

改めて振り返ってみると、私は読書は好きだが特別速読でも多読でもなく、どちらかと言うと１冊の本をじっくり読み余韻にひたる方だった。それなので、ある作家の作品を全て読破等という事は到底できない。数多く読んでいる訳でもなく、読んだと思っていた本も実は大して読み深められてもいなかったのだ。そう思うと、今まで娘に対して物足りなく思っていた自分が恥ずかしくなってきた。

こんな私だが『路傍の石』には深く心に残っている部分がある。それは吾一少年が進学の夢を絶たれ、呉服屋へ奉公に出た時の場面である。恩師からいい名前だと言われて誇りにしていた「吾一」という名前を、奉公先であっけなく「五助」に変えられてしまう。その事で吾一はひどく傷つくが、当時の私は名前を変えられる屈辱が理解できずに「どうしてそこまでこだわるのか」と感じたのだった。

しかし時がたち、私も大人になるにつれて、名前を変えられるという事は、私が私であるという「自分」の存在すべてを否定し、打ち砕かれるような屈辱的な行為だということが理解できるようになった。そんな時ふと、かつて読んだ吾一少年のことを思い出し、その屈辱を改めて味わってきたのである。

読書とは、読んだその時に感じたり理解したり心に響いたりするだけでなく、何年もたってから不意に「ああ、あれはこういうことだったのか」と教えてくれたりもするのだ。多読でも速読でもない私だが、こんな読み方もきっとあってよいだろう。

「あーお母さんどうしよう。感想文が終わらん。」

また、娘の声が聞こえてくる。やれやれ、と思いつつ、今までよりは少し柔らかい声で娘に答えることができた。

【小・中・高等学校・大学等の部】
最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「キラキラさかな」

国東市立国東小学校１年　**瀬　田　夏　未**

わたしは、どくしょがすきです。おはなしのなかに いるみたいになります。たのしいおはなしが いちばんすきです。

きょねんまでは、あんまり えほんを よんでいませんでした。ようちえんの ねんちょうのなつやすみになったとき、おかあさんが がようしでおおきいさかなを つくってくれました。そして、「さかなにうろこをはって。ほんを１さつよんだら、さかなにうろこを１まい はるよ。」といったので、たのしそうだとおもいました。

おかあさんが、

「もくひょう なんさつにする？」ときいたので、「100さつにする。」といいました。キラキラのおりがみをもらって、うろこを100まい きりました。２じかんもかかりました。

さかなは、りびんぐに はって かぞくや おきゃくさん みんなに みてもらいました。

おばあちゃんが しごとからかえってきたら、まいにち

「うわぁ、きょうも がんばったんやなあ。キレイになったな。」といってくれて、すごく うれしかったです。

うろこが だんだん いっぱいになって、さかなが きれいに なっていって、とってもとってもうれしくなりました。『にじいろのさかな』みたいにピカピカになりました。うろこを はるのがたのしみで、どんどん どくしょが すすみました。

おかあさんが、かわいいノートをかってくれて、よんだほんの だい と さっすう をかくこともしました。

としょかんに たくさん いくようになったので、ししょさんも わたしのことを おぼえてくれて なかよくなりました。だんだん、ししょのおねえさんが、おすすめの ほんをえらんで まっていて くれるように なりました。きょうは、どんな ほんを えらんで くれているかなと たのしみになりました。

なつやすみのおわりのとき、172さつ よんでいて、さかなが ２ひきになりました。おおきな かみに はって すいぞくかんを つくって ようちえんに もっていきました。おともだちや せんせいから ほめられて、つづけて がんばろうと おもいました。

いまは、じ が いっぱいの ふといほんも よめるようになりました。きろくのノートも３さつめになって、1100さつをこえました。

このまえ、おかあさんが こどものときに よんだのと おなじほんを よみました。いままだ あるって すごいなって おもいます。

ほんは、わたしが しらないことが いっぱいつまっていて たのしいです。これからも、ほんを いっぱい よんで いろんなことを しりたいです。

【小・中・高等学校・大学等の部】

優 秀 賞

「私の礎をつくるもの」

大分県立大分豊府中学校２年　尾　形　萌　音

私の家の２階の廊下には、大きな本棚がある。絵本や児童書が200冊以上並んでいる。私はよく、本棚の前に座り込んで、好きな本を手に取り、ついつい熱中して読んでしまう。読書は私にとって、日常生活の中のちょっとした息抜きであり、本当に大好きな時間なのだ。忙しい中でも、ひまを見つけては、読書に勤(いそ)しんでいる。

最近は、「パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々」という本を夢中になって読んでいる。本を開く。主人公たちの友情や恋愛、仲間とともに戦い、苦しみながらも成長していく姿、物語の世界に入り込み、空想の世界に没頭する。好きな本を読んだ時の満足感や楽しさは、何事にも代えがたいものだ。

私がこんなに本を好きになったのは、子どもの頃、両親が毎日たくさんの絵本を読んでくれたからだと思う。毎晩寝る前に父か母が、私と姉の好きな絵本を読み聞かせしてくれた。特にお気に入りの絵本は、「うちにかえったガラゴ」で、何百回読んでもらったか分からない。お休みの日、１日に８回同じ本を読んで読んでとせがんで、読んでもらったこともあるそうだ。他にもたくさんお気に入りの絵本があり、今でも時々、手に取り読んでみる。自分で読んでもやっぱりおもしろい。

色々な絵本の世界の空気感は、私の中にしみ込んでいき、幼い私は絵本の中の言葉をどんどん吸収していった。今でもふとした時に、絵本の中の言葉が口をついて出てくる事があるくらいだ。父や母や姉も、同じような事があり、みんなで顔を見合わせて笑ってしまう。そんな時、心が温かくなり、絵本をたくさん読み聞かせしてもらって、本当に幸せだったなあと思う。

人は、思考するときに、言葉を使って考えていると思う。子どもの頃から様々な絵本の世界に触れ、美しく豊かな言葉を吸収できたことは、私の宝物となっている。私の思考の礎には、絵本の中の言葉たちがあるのだ。

中学生になった今、読みたい本も読むべき本もたくさんある。読書は私の世界を広げ、その中で出会う言葉たちが、私の思考を深めてくれることだろう。これからも、どんどん本を読んでいくつもりだ。読書は、今の自分の楽しみでもあり、未来の自分への贈り物でもあるのだ。

【小・中・高等学校・大学等の部】

優 秀 賞

「曾祖母（そうそぼ）の温もり－読み聞かせをとおして－」

大分県立三重総合高等学校１年　佐　藤　悠　衣

私の本との出会いは４才でした。それは眠ることへの恐怖とともに訪れたのでした。

当時４才だった私は、曾祖父母（そうそふぼ）の家を訪れていました。遊び疲れていつのまにか眠りについた私が目を覚ますと、辺りには誰もいません。実は、病院にいる姉に付き添うため父母はそっと抜け出していたのでした。しかし、当時の私はそんなことを知る由もありません。大声で父母を探す私に「悠衣さん、どうかしましたか。」と優しく声を掛けてくれたのは曾祖母でした。父母に置いていかれたとパニックになった私は、それ以後、できるだけ寝ないように寝ないようにと大声を上げ、暴れるようになりました。

そんな私を落ち着かせてくれたのは、曾祖母の「読み聞かせ」でした。毎夜毎夜、私が落ち着くまで気長に待ってから、「悠衣さん、今日はこの本を読みましょうね。」そう言って優しく手を握り、寝かしつけてくれるのでした。印象に残っているのは、自分の爪が嫌いな少年の話です。少年は不思議なおじいさんから動物たちの爪をもらうのですが、実際付けるととても不便で後悔します。そこでおじいさんは元の爪に戻すのですが、曾祖母の「悠衣さんも、今の悠衣さんが一番素敵ですよ。」と言ってくれたことが一言が忘れられません。このような毎日を過ごすうちに、私は安心して眠ることができるようになりました。

私を寝かせてくれる本が、絵本から小説になっていった中学生時代、すっかり読書にはまった私を、友だちは「読書好き」と評して図書委員長に推薦してくれ、私の本に対する愛情はどんどん深まっていき、本無しでは生きていけないようになっていました。

その頃、90才を迎えようとしていた曾祖母は高齢のためか、歩くことができないようになりました。表情まで乏しくなり、とうとう施設で寝たきりの生活を送るようになりました。私は時間があれば施設に通い、曾祖母に本を読み聞かせするようにしました。早く元気になって笑顔が見たい、そんなことを思いながら。施設に通い始めて３ヶ月（かげつ）が過ぎたとき、その日はちょうど曾祖父（そうそふ）の誕生日でしたが、自宅で行った誕生日パーティーに参加できなかった曾祖母のために、いつもより張り切って読み聞かせをしてあげました。半分ほど読み進んだ時、曾祖母がそっと口を開きました。「悠衣さん、ありがとう。」笑ったような気がしました。曾祖母は疲れたのか、そのまま眠ってしまいました。そして、二度と目を覚ますことはありませんでした。曾祖母は私の読み聞かせを最後まで聞かずに、旅立ってしまったので、葬儀の日、遺影の前で残りの部分を読み聞かせしてあげました。

私にとって「読書（読み聞かせ）」とは、「曾祖母の温もり」を感じることです。曾祖母は読み聞かせを通してたくさんのことを教えてくれました。お米には神様がいるから一粒も残してはいけないこと、どんなときも私の側には家族や友だちがいることなどを、いつも優しい声で伝えてくれました。幼い私は不安や恐怖を忘れ、安らぎを手に入れることができました。さらに読書家としてのきっかけを与えてくれ、多くの本との出会いへと導いてくれました。すべてが「曾祖母の温もり」であったと感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。本にはその本自体の物語だけでなく、その本を取り巻く人々の物語があると聞いたことがあります。読み聞かせの思い出は私と曾祖母、そして書斎で眠っていたたくさんの本たちとの思い出でもあります。一つひとつが宝物となって今の私を作っていると感じます。

現在、高校生になった私は演劇部に入りました。今は「読むこと」から「演技」を通して「物語の世界」を生きています。まだまだ指導されるばかりで少しも上手ではありませんが、精一杯の私を曾祖母が笑って見てくれているのではないかと思いながら……。

平成28年度
最優秀・優秀作品

テーマ　「わがまちの誇（ほこ）り」

※平成28年度より部門を「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」から「小学校の部」「中学校・高等学校の部」「大学等・一般の部」の３部門に変更しました。エッセーのテーマは共通です。

【小学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「杵築市の自まんカブトガニ」

杵築市立杵築小学校４年　**松　藤　龍　哉**

ぼくの住んでいる杵築市の自まんと言えばすぐに思いつくのが、カブトガニです。

カブトガニは、ぼくの家からも見える杵築市の守江わんに生息しています。カブトガニは、「生きた化石」とよばれ、何億年も前からほとんどすがたが変わっていません。杵築市のいろいろなところで、マークとして使われたり、杵築市の校長先生が考案したカブトガニの折り紙は、杵築市におとずれた観光客の人たちに配られたりしています。この折り紙を大分県体の時に、杵築市の選手団が持って入場行進したこともあったそうです。

そんな自まんであるカブトガニは、今では大分県の杵築市と中津市、そして岡山県や山口県福岡県の一部にしか生息しておらず、かんきょう省のレッドリストに、ぜつめつきぐ種として、のせられています。

杵築市の自まんであるカブトガニが、どうして、ぜつめつのききにあるのか、おうちの人に聞いたり、インターネットを使って調べたりしてみました。

今から、四十年ほど前までは、杵築の海にもカブトガニがたくさんいたそうです。そのために、漁をすると、カブトガニがあみにたくさん引っかかってしまうので、大事なあみを守るために、カブトガニの足を切って、田畑のひりょうにしたり、すてたり、食べたりしていたそうです。母が小学生のころ、港に写生に行ったとき、足を切られたカブトガニが山積みにされているのを見たことが、今もわすれられないと話をしてくれました。

他にも、きたない下水が海に流れこんだりゴミをすてて海がよごれたりしたことも、カブトガニが少なくなった原いんです。一年生のころに、『ウミガメのなみだ』で、ウミガメたちが、クラゲとまちがえてビニールぶくろを食べて死んでしまったお話の勉強を、カブトガニのことを調べていて、思い出しました。カブトガニが住む場所を、人間がきたなくしてしまったのだと思います。

杵築市の自まんであるカブトガニを守っていくために、自分にできることを考えてみました。ゴミは、必ずどこに行っても、ゴミばこにすてるか、持って帰りたいと思います。他にも、水をよごさないために、ちゃわんをあらうときは、せんざいをたくさん使わないように気をつけたいと思います。

杵築市でも、りょうしさんたちが、海を守るために、月に一度は海のそうじをしたり、海を豊かにするために、山に木を植える活動をしたりしているそうです。ほかにも、カブトガニを守る会の人たちが、カブトガニのさんらんをする場所をそうじして、みんなでカブトガニを守ろうと取り組んでいます。

みんなの力を合わせて、いつまでも、カブトガニが杵築市の自まんだと言える町にしていけるように、ぼくもがんばっていこうと思います。

【小学校の部】
優 秀 賞

「歴史を感じて」

杵築市立大内小学校４年　**阿　部　雷　蔵**

今年、ぼくは四年生になった。歴史にきょうみが出てきて、公民館で開かれる「杵築市こども歴史探険たい」に入った。杵築市は小さな城下町で、古くからのものがたくさんある。それがぼくのちょっとした自まんだ。その中から三つしょうかいしてみようと思う。

まずは、お祭り。杵築市には、春のお城祭り、夏の天神祭り、秋のどぶろく祭りとあって、たくさんのお客さんが市外からも来てくれている。暑くなってきた今の季節、ぼくが楽しみにしているのが天神祭りだ。このお祭りは、毎年夏休みに入ってすぐの７月24、25日に行われる。ぼくは毎年、両親と弟の家族四人で出かける。けいだいや通りには出店がたくさんならんでいて、人通りも多く、こんざつしていて歩きづらいくらいだ。ぼくも弟もくじびきをするのが大好きで、何が当たるかどきどきする感じがたまらない。金色にかがやくおみこしやおはやしの音楽といっしょに近づいて来る大きな山車が城下町の商店がいに出て来て、ごうかで迫力がある。外国の人が侍のかっこうをしているのもよく見かける。ぼくもおみこしをかついだり侍のかっこうをして城下町を歩き回ったりしてみたいなと思う。

このわくわくするお祭りを始めてくれた昔の人たちのことを想ぞうして、「きっと今のお祭りを天国から見ていて、いっしょに楽しんでくれているのだろうな。」と考える。このお祭りのおかげで、ぼくの夏休みはもり上がるので、昔の人には感しゃしている。だからぼくがおじいさんになっても、古くから伝わる天神祭りがずっと続いていてほしいと願っている。

次にしょうかいしたいのは、日本一小さいお城といわれている「杵築城」。
いろんな人から、
「杵築城は日本一小さいお城だよ。」
と言われていて、ちょっといやだな、はずかしいという気持ちになっていた。でも、三年生の時に見学に行って係の人の説明を聞いてからは杵築城が大好きになった。それは、杵築城が海に面しているため、敵はなかなかお城の中に入れず、ほとんどの戦いに勝っていたという話だった。そんなふうに戦いに勝っていったから今でもお城や城下町が残っているのかもしれないと考えるようになった。今はこの日本一小さい杵築城をほこらしく思う。

最後にしょうかいするのは、人間がつくった古いものではないが、他の地いきにはあまりいないカブトガニだ。生きた化石とも言われているカブトガニは一回のだっ皮でもとの体の大きさの1.3倍になるらしい。ビデオでだっ皮のしゅん間を見たときは、思わず３・４年生全員がはく手してしまうくらい一生けん命な様子で感動的だった。

ゆたかな自然と歴史がある杵築市に住んでいて本当によかったなと思う。

【小学校の部】
優 秀 賞

「わがまちの誇り」

杵築市立豊洋小学校５年　手　島　悠　斗

ぼくの住んでいる豊洋地区は自然豊かで緑がたくさんあるところが自慢だと思っています。

ぼくの家はとても緑に囲まれていて、学校に歩いて登校する時も、緑は必ず目につきます。一年を通して、葉の色がだんだん変わっていく、四季の変化もわかります。また、もう卒業した友達の家の庭はさらに緑がたくさんあって、野球などをしてよく遊んでいました。とても広い庭だったので、思いっきり打ったり、走ったりできました。

豊洋は、景色もとてもきれいです。日がしずむとき、山にしずんでいく景色が特にぼくは好きです。そして、たまに父さんと妹、弟と家の近くの散歩にも行きます。田植えした稲の穂がだんだん成長して黄金色になった時が、ぼくは一番好きです。また、春になると家の近くの桜の花が咲き、家族みんなで外をながめながら、

「きれいだな。」

「うん。そうだね。」

と話したりしながら桜を見ているのは楽しかったし、とても心に残っています。

また、豊洋には「見立山」という山があります。夜になると見立山の頂上に建っている鉄とうが赤く光ります。まるで見立山が生きているように感じます。この夜の景色もぼくは好きです。

ぼくはこれからも自然を大切にしていきたいと思いました。昔小さいころのぼくは、「大分市などのようにたくさんの建物が、ここにあればいいのに」と思っていたけれど、今は緑がたくさんあるこの環境がとてもいいなと思うようになりました。だから、いつまでも緑をなくさないでほしいと思っています。なぜなら、緑は人の心をいやすと思うからです。だから緑をなくしてほしくありません。そしてまた、木々がなくなったら、ぼくはさびしくなると思います。建物がたくさんある大分もいいけれどその中に、たくさん緑もあったほうがいいと思います。だからぼくは自然いっぱいの緑が豊洋のほこりだと思います。

また、毎月全校で取り組んでいるクリーンクリーン作戦という清そう活動や海開きの前にしている浜そうじ、松の植樹など、自然を守る活動をこれからも続けて、がんばりたいと思います。

【中学校・高等学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「わたしのまちから全国に」

大分県立鶴崎高等学校２年　**森　﨑　　澪**

浜辺の足音はサクサクと気持ちが良い。ガラスよりも透きとおるきれいな水が小さな波を立て、キラキラと太陽を照り返している。こんな光景が見られるなんて、八年前の自分には思いもしなかっただろう。

私が生まれ育った大分市の八幡地区は、海や山、川の全てを味わうことができる自然豊かな場所です。また、これらに加え温泉も味わうことができます。

このまちの誇れる所はこれだけではありません。その自然をきれいに保とうと地域の人々が活発に活動し、自然と人との共存が成り立っているのです。

私が小学生の頃、このまちにはある問題がありました。それは環境についてでした。小学校の横をながれ、海まで続いている川は、いつも茶色く濁り、川のまわりの家から出る洗濯物の洗剤や汚れが川に捨てられ、変色したり泡が立ったりしていました。また、山は高崎山とつながっているため、猿が来て、山を荒らしていき、とても困りましたし、何より遠くから来て、犬や猫、家具などを捨てていく人が多かったため、捨て犬や捨て猫が増え続けてしまっていたのです。そして近くに海水浴場がある海では、人通りが多いため、ゴミがたくさん捨てられ、砂浜をサンダルなしで歩くのはとても危険でした。

これらの環境問題を改善しようと立ち上がったのは地域の人々でした。まず取りかかったのは山のゴミに関してです。ゴミは、よく草が茂っている人が立ち入らないような所に多く捨てられていたため、道などをきれいにしたり、空き地の草を刈ったりして、ゴミを捨てられない環境作りをしました。そして、立ち入り禁止区域には柵を作ったりして不法侵入等も防げるようにしました。そして次に取りかかったのが海です。海は別大マラソンの参加者とゲストで行うゴミ拾いなどを中心に、年に何回も「裸足で歩けるビーチ」をキャッチコピーとして取り組み、今では本当に裸足で走れるほどきれいな砂浜になっています。そして最後に、一番の問題であった川に取りかかりました。川のクリーン活動には地域の小学生も参加しました。当時小学生だった私ももちろん参加しました。小学生である私たちは、竹炭作りをしました。竹炭は文字どおり竹を切って焼き、炭にしたものです。竹炭には消臭効果や水をきれいにする働きがあり、竹炭を作って川に入れ、透き通ったきれいな川を目指し、活動しました。地域の人々と小学生の協力があって、現在は川の水がとても透き通り、魚やカメ、鳥、ホタルも増えました。川がきれいになると海の水もきれいになって、このまちの山、川、海はどれもきれいで、その上住みやすいまちになりました。そして何よりすごいのは、一度きれいにした自然が今でもきれいなままであるということです。

私はこのまちを本当に自慢に思っています。自分たちの住んでいるところの自然環境が悪くなっていることに、いち早く気がつき、改善にとりかかる。これはいつも周りの環境をよく気にかけていて、変化に気づけるような人でないと無理です。それに、改善に取りかかるとき、強制参加させたわけではないのに自然と人が集まる姿に、地域の方々のこのまちを愛する心が、環境をきれいにしたのだと感じました。

私は、このような経験を通して、この地域改善の輪は全国に広げられるのではないかと思いました。各地域の問題点をそれぞれの地域で見つけ、それを改善させていくことによって、大分市全体に良い環境を広げる。

そして、各市の誇れるものをもっともっとPRしていけば、今度は大分県が豊かなものとなり、自分のまちから大分県を変えることも、夢ではありません。そして、その連鎖を県から県へと広げていくことによって、全国に良い連鎖をもたらすことができます。私たちが、日本全国をも変える力を持っていることを、このまちが教えてくれたのです。

【中学校・高等学校の部】
優 秀 賞

「ふるさとの力とこれからの大分」

大分県立鶴崎高等学校２年　太　田　美　緒

人にはそれぞれ生まれながらの故郷がある。私は今、自分の故郷である鶴崎に育てられたことを実感している。鶴崎で行なわれる祭りでの体験が今の私をつくってくれたのだ。

鶴崎では、毎年夏に二つの祭りが行なわれる。「二十三夜祭」と「鶴崎踊り」である。この二つの祭りは昔から伝統的に行われており、近年では地域の人だけでなく外国からもたくさんの人が集う大きな祭りとなっている。花火や出店などがあってとても楽しく、同時に私はこの二つの祭りを誇りに思っている。それも、あるエピソードがあったからだ。

それは、私が中学二年の頃、二十三夜祭を満喫していた時だった。私はかき氷を美味しく食べていたのだが、周りを見てみると何やら黄色いチョッキを着たおじいさん達が、道路に落ちていたゴミを拾っていた。その時の私は未熟なことに、それを見るまで道路にゴミが落ちていたことに気付かなかった。その後私は鞄につけていたキーホルダーをどこかに落としてしまった。しかし、諦めて出店を回っていると、五歳位の小さい子供が自分に届けに来てくれた。落としたのは随分前だったので、きっと落とした時からずっと追いかけてくれたのだろう。そのこともあったが、何より拾ってくれたこと自体がとても嬉しかった。鶴崎にはこんなにも優しい子供がいるのかと感心し、誇りに思った。

また、中学三年の頃は、自分は鶴崎踊りに踊り子としての参加はしなかったが、友達が踊り子として参加するということで、練習について行った。しかし、行ったはよいものの、知らない人ばかりで、友達はずっと練習をしていて、私はただ一人で見ていることしか出来なかった。そこに一人のおばあさんが来てくれて、参加をしない私にも優しく踊りを教えてくれた。そして私は地域の人の優しさ、温かさを知ったのだ。

これらの経験を通して私は高校生となり、大きく成長することが出来た。それも、地域の人のおかげであり、そんな温かい人がたくさんいる故郷のおかげである。鶴崎は、私を成長させてくれた誇り高い町なのだ。

鶴崎だけでなく大分には、様々な地域で小規模なものから大規模なものまでたくさんの祭りがあり、どの祭りも多くの地域の人に長く愛され続けている。しかし人間というもの、どうしても祭りに来ると興奮して周りが見えにくくなってしまうものである。そして祭りの後には、ゴミが目につく。だが、祭りに来ている人は少なくとも地域を愛していると思うので、地域がゴミだらけになるのは嫌なはずである。大分には心優しく地域のことが大好きな人がたくさんいるが、自治会の人だけでなく、地域の皆がもっとすすんで祭りに参加し、周りに気を配るようになれば、さらに町はきれいになって祭りに参加する人も増え、今以上に誇りを持てる町になるとも思う。

そして私達は、未来の子供達が温かく成長するためにも、祭りを絶やさず、この誇り高き故郷の伝統を受け継ぎながら、町を活性化させていく必要がある。そのためには、否が応でも行政と関わっていかなければならないだろう。高校生である私達に出来ることは限られており、大人のように選挙に出馬して自治活動や祭りを盛んにするきまりを作ることは出来ないが、もうすぐ十八歳になる私達には、選挙権ができ投票に参加することが出来る。選挙のことはまだよく分からないから誰でもいいと投票する訳にはいかない。これからの大分をよりよくしていくためには、自分の一票を大切にして、しっかりと考え、ふるさと大分の伝統を活かすことのできる人を見極め、投票するという義務が、大分県民である私達には、課せられていると思う。

このように大分をよりよくするために私達が出来ることは色々とある。幼い頃の私のように、鶴崎の人々や、伝統的な行事によって成長していく子供が増えてほしい。私は、この祭りでの体験をきっと子供たちに伝えるだろう。

【中学校・高等学校の部】
優 秀 賞

「大分の風に思いを託して」

大分市立滝尾中学校３年　川　村　　萌

四年前の夏。私は初めての引っ越しを経験した。それも、住み慣れた大分から未知の北海道までの大移動だった。私はあの時、住まいだけでなく、他にも多くのことが変わってしまったように思った。幼い頃から続けていた習い事をいくつかやめた。以前はすぐに会いに行くことができた祖母と、電話でしか話せなくなった。知り合いのいない北国で、家族五人、言いようのない寂しさを抱えていた。

しかし月日を重ねていくうちに、新しい生活にも慣れ、寂しさは薄れていった。あんなに珍しかった雪にも、親しみさえわくようになった。それでも私達は、以前とは違う寂しさを感じていた。自分が北海道弁を口にするたびに、そしてテレビで雪がない九州の冬を目にするたびに、大分が遠のいていく気がした。小さかった一番下の弟にいたっては、大分のことなど忘れ、すっかり北海道を満喫しているようだった。

何しろ北海道には、美しい自然やおいしい食べ物がたくさんあった。本当にすてきなところだった。

しかし私達はずっと、心の中で願っていた。

「大分にもう一度帰りたい。」三年たっても、大分への思いは薄れなかった。むしろ強くなっていた。そしてついにその年の夏、大分への転勤が決まったのだ。

飛行機から大分に降り立った瞬間の、あの感動は言葉にできない。引っ越すまでは好きではなかったあの蒸し暑い、なまあたたかい風が、私の体を包んだ時、一気に嬉しさがこみ上げてきた。三年間の空白など気にならず、北海道を懐かしむ余裕すら生まれた。

ところが、久々の故郷は予想外の連続だった。転入した中学校は、それまで通っていた中学校とは比べものにならないほどのマンモス校だった。幼なじみだった同級生も、以前とは雰囲気が変わっていた。そのうえ、まちの様子も大きく変わり、ひどく都会に見えた。なんだか、浦島太郎にでもなったような気分だった。

それでもやはり、故郷であることに変わりはなく、北海道で感じた寂しさを味わうことはなかった。それどころか、引っ越しを経験したことで、以前よりも増して、大分のよさが身にしみるようになった。それは私が変化したからなのか、それとも大分が変化したからなのか。ひょっとしたらその両方かもしれない。庭で育てたかぼすのみずみずしさ。祖母の家の近くの、きらきらと輝く大分川の水面。田ノ浦の静かな波音と、爽やかな潮風。別府の湯けむりと、かすかな温泉の匂い。そこには思い出がある。そしてささやかな幸せがある。そのことに私が心を動かされるのは、引っ越しがあったからだと思う。あの時感じた寂しさも、あの時見つけた北海道のすばらしさも、私の大切な糧になっている。

私も、大分も、日々変化し続けているという事実。引っ越しの時は変化を感じるのが寂しかったが、今の私にははっきりと言える。「変化」は「成長」なのだ、と。

一つの変化が、変化の連鎖を生む。その先に成長がある。私が変化し、成長していくのと同じように、大分にも新しい名所ができ、多くの人が集まって、変化し、成長していく。でも、大分が私の大好きな故郷であるということは永遠に変わらない。

これからも、大分が多くの人に愛されるまちであり続けるために、日々の思い出の中にある大分を胸に焼きつけながらも、新しい大分のよさを探していくことが大切なのではないだろうか。ただいたずらにまちを変えても、幸せは生まれない。人々に寄り添って変化していくまち、そんな温もりのある大分を失ってはいけない。

まちと人々が互いに寄り添うまち、大分。訪れる人々に思い出を、そして幸せな気持ちを。住む人のあたたかさで、大分を包み、訪れた人々を包みこむこと。それが、私たちに思い出と安らぎを与えてくれる大分への、ささやかな恩返しである。

【大学等・一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「ご先祖様とつくるふるさと」

玖珠町　手　嶋　郁　子

私のふるさとは大分県西部、日田市大肥町です。福岡県朝倉郡東峰村と隣接しています。その小さなふるさとには、地域活動として長く続けられているお墓掃除があります。数年前母に尋ねた時、嫁いできた時にはすでにお墓掃除はしていたと話していましたので、六十年以上は歴史のある活動だと思います。お世話は地域の婦人会長さん。毎月一回、日曜日朝八時から十時頃まで、その日が都合が悪ければ、前日の土曜日に実施していたと教えてくれたことを覚えています。

私が子どもの頃、母や祖母が用事がありお墓掃除に参加できない時、姉と箒や草取り用の小さな鎌を持って参加していました。今ではすでに亡くなっている近所のおばちゃんたちが働き盛りで活動の中心だった頃です。小さかった私たち三姉妹は、おばちゃんたちに混じり、おしゃべりしながら草取りしたり、枯れ葉を掃いたりしました。草は根元をしっかり握り根から抜くこと、掃く時は枯れ葉を上手にかき集めて土は取りすぎないこと、お墓のそばの小さな橋を渡る時は下の段にもお墓があるので「渡らせてもらいます」と仏様にお断りしながら通ること等教えてもらいました。お盆前の掃除では、汗だくで頑張ると木陰でひと休み、みんなでアイスキャンデーを食べました。

「お墓掃除をするとご先祖様が喜んでくれるよ。」「ご先祖様が守ってくれるよ。」「お利口さんになるよ。」とおばちゃんたちの元気な声や大きな笑い声が今でも聞こえてきそうです。温かくて嬉しくて懐かしい今は亡きおばちゃんたちとの思い出です。

七月下旬、姉と里帰りして今年もふたりでお墓掃除をしました。久しぶりに山にのぼってみましたが、今年もお墓の周りは草もなく花立も湯呑みも綺麗にしてもらっていました。つい当たり前のように見ているこの景色もご近所のみなさんの活動のおかげだと思うと、胸が熱くなり汗と涙でグチャグチャになりました。一緒に掃除している姉にも涙が伝染してしまうと思い、そっとぬぐいながら掃除しましたが、日頃のみなさんのおかげで一時間ほどで仕上げることができました。それから半月後のお盆前にも一度お墓掃除をして頂いていました。今では地域の人数も減り大変なようですが、農繁期を除く月、特に春秋のお彼岸前やお盆前に集中して力を入れて掃除しているということでした。

私は還暦を目前にしています。里は今両親がグループホームのお世話になっているので空き家状態ですが、ご近所の方々の温かい見守りの中で離れて暮らす私たち姉妹も安心して生活することができています。この歳になりふるさとを思うとき、ご先祖様たちが活動を通して人々のつながりを強くしてくれていると思うようになりました。活動の中心だった母世代は八十、九十を優に越え、地域もすでに「限界集落」となっています。当時たくさんいた子どもたちも今では数えるほどもないくらい減っています。今後の課題はたくさんありますが、そういう中でも地域活動のお墓掃除は脈々と受け継がれています。豊かな生活と引き換えに人と人とのつながりは薄れていると言われる今ですが、私の小さなふるさと、わずか二十五世帯の地域にはご先祖様と人々をつなぐお墓掃除があります。ご近所同士、力を合わせて交流する中で助け合う心、先祖と向き合い敬う心、そして、日々の忙しさの中で時間をつくり掃除しながら何より自分を磨く尊い活動だと思うようになりました。

わがまちの誇りは、私のふるさとに受け継がれているお墓掃除です。ふるさとのみなさんに私の溢れるほどの感謝と敬意を表しながら自慢したいと思います。

【大学等・一般の部】

優 秀 賞

「由布には菜の花が」

大分市　朝　日　容　子

朝のウォーキング中、私の住む大分市の高台から、由布岳が一望できる場所がある。

二月初旬、雪を頂く由布岳の美しさに友と二人、足を止めて眺めていると高齢の男性が話し掛けて来た。

「あん山が由布で、そん隣が鶴見、手前が高崎山、そん間に見える山は何か知っちょるな」と遠くの山々を指さした。

私達は顔を見合わせ、即答できずにいると、

「ありゃ、伽藍(がらん)岳や」と誇らしげに言った。

「あん中でも、わしは由布が好きじゃ。長く生きちょんと色々ある。くよくよしても仕方ねえから由布に向こうて手を合わせるんじゃ。そうしたら悩み事が消えちしまうんじゃ」寒さで頬を赤くしたご老人は、そう話し終わると、生き生きとした顔で歩を進めた。

丁度その頃、私の参加する読書会の先生が体調を崩された。以来、私はこの場に来て先生のご無事を祈ることにした。米寿を迎えた先生は豊かな感性と記憶力で読書に親しみ、敬愛された。二月の読書会では会員からのバレンタインチョコに人懐こい笑顔が弾けた。

一ヶ月後、別れは突然に訪れた。ご家族の話では旅立たれる数日前、病室から由布岳を望み「今日の由布は美しいのう」と安らかな顔をされたそうだ。

三月、雪が解け由布岳に春がすみが掛かり緩やかな風が朝靄を稜線へと運んでゆく。野に広がる菜の花が、遠くの由布岳と調和し、先生の温かな笑顔と重なった。暫く眺めていると由布岳の山容が富士山に似ているようで友人に問い掛けた。

「そうねえ……。だから『豊後富士』と呼ばれるんじゃないかなぁ」と納得げに答えた。

ふと、太宰治の小説『富嶽(ふがく)百景』の一節、

「富士には月見草がよく似合ふ」が浮かんだ。

調子に乗って「由布には菜の花がよく似合うね」と言うと友人は、フッと笑って頷いた。

今年の八月十一日。新たな国民の祝日として『山の日』が施行された。

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日」との趣旨である。その意味では、ウォーキング中に出会ったご老人の「由布岳に手を合わせ、悩み事が消えることで感謝の念を抱き、生きる勇気を奮い立たせる」という行為は『山の日』の趣旨と重なった。

猛暑日が続く八月十四日。衝撃が走った。母が救急車で運ばれた。早朝、介護施設の看護師さんからの電話で目が覚める。

「声掛けに応答がないので直ぐ来て下さい」緊迫感ある声に私は夫の車に飛び乗った。どんなに急いでも母が運ばれた病院までは一時間はかかる。到着したときは、施設の先生が付き添って下さり、母の診断が下されるまで待った。病名は脳梗塞。その後、私の呼び掛けにも応答せず、意識がはっきりしない状態が暫く続いた。

母は夫に早く先立たれ、長年独り暮らしであった。気丈で何事も完璧にこなす母であったが、八十を過ぎた頃から物忘れが多くなり私は八年間、大分市から通って母の介護を続けて来た。最近、独り暮らしが危うくなり実家近くの介護施設にお願いすることにした。母が病に倒れて、丁度一週間。夢を見た。

（母と二人、山道を歩いている。ふと気が付くと母の姿がない）何か起きたに違いない。嫌な予感がした。焦って朝一番、病院に電話。

「お母さん、昨日から快方に向かってますよ言葉も少しずつ出てきました。――」看護師さんの言葉に耳を疑った。

「えっ！ 本当ですか。それっ。本当のことですか！」私は矢継ぎ早に訊いた。

もう一度、母と話せる。思った途端、一気に涙が零れた。（由布岳が母を守ってくれたのだ……）私は感謝した。病院の先生方、看護にあたって下さった全ての方々に。

次の朝、由布岳に手を合わせた。山容の美しさだけでなく、人々の心を癒し温かく包んでくれる由布岳は、わが大分の誇りである。

やっぱり「由布には菜の花がよく似合う」

【大学等・一般の部】
優 秀 賞

「忘れえぬ景色のあるまち」

杵築市　堀 内 真 由 美

「天神坂からの眺めが好きなんだ」

子どもの頃、三歳年上の兄がそうつぶやいたことがあった。私は内心ドキッとした。実は、私も天神坂から町を見渡すのが好きだったのだ。そんなふうに思っているのは自分だけだと思っていたのに、こんなに身近に同じことを考えている人間がいたことが驚きだった。

天神坂から町を眺めると、白壁と屋根瓦の間から?瓦造りの三本の大きな煙突が伸びているのが見えた。

「あの煙突の根本はどこなんだろう」とは思ったが、それを探す探検に出かけるという発想は全く浮かばなかった。ところが偶然、その中の１本の根本を発見することができた。６年生の時だった。友達のうちの会社の倉庫で遊んでいた時、倉庫の中にその煙突の根本の１本を発見したのだ。「ここだったんだ」と何だか感慨深い感情が心に湧いたのを覚えている。今、天神坂に立っても、三本の煉瓦造りの煙突はもう見えない。

「坂道の城下町」としてアピールを始めた私のふるさと杵築。確かに坂道は、知らず知らずのうちに、子どもの頃の思い出に結び付いている。観光客用のマップには、いろいろな坂の名前が記されている。ただ、ここに生まれ育った私のお薦めは坂道＋α である。坂と言えば低い土地と高い土地をつないでいるわけだが、その坂どうしを横につなぐ道がところどころに存在する。土曜日の午後、習い事に通うため、その道を通っていた。紺屋町の坂、ひとつ屋の坂、富坂を蛇行しながらつなぐ徒歩でしか通れない道、坂どうしをつなぐ道、それが＋α の道。「この道を行ったらどこに着くのかな」と思いながら辿ったら、思いがけない所につながっていて新大陸発見くらいの大発見をした気分になったのを覚えている。子どもの頃の私の二つ目のお気に入りの道である。

TBS 系のテレビ番組「がっちりマンデー !!」に時折出演している東洋経済新報社取締役編集局長の田北浩章氏は、杵築市出身である。小学生の頃、一学年上に在籍していたことを覚えている。彼が新聞に寄稿した文章の中に、ふるさとに寄せる思いが綴られていた。今でも月１回は杵築に住むお母さんに会うため東京から帰郷するという彼は、空港で借りたレンタカーを必ず奈多海岸で停め、市杵島を眺めるのだそうだ。その静かなひとときき、都会の喧噪や仕事での疲れを忘れ「帰ってきた」という至福の感情に浸ることができるのだという。市杵島は奈多海岸の沖合にある岩礁で、赤い鳥居が神々しい印象を与える島である。前出の兄にとっても、市杵島は特別な島だった。兄の世代では、市杵島まで泳げたら一人前の男子中学生という意識があったらしい。田北氏にもその意識があったかどうかはわからないが、市杵島が子ども時代の田北氏にとって杵築を象徴する特別な場所であったことは間違いないであろう。

平成24年の大分銀行のカレンダーに市杵島の写真が採用された。「伝統色で見る大分の風景」の群青色の風景として、朝日に照らされた奈多の海に浮かぶ市杵島の写真が載ったのだ。市杵島の写真は、ほかの風景よりも大きなスペースを割いていただいて中央に大きく載っていた。朝日に輝く群青色の奈多の海と市杵島はとても美しく、カレンダーの中央に大きく据えていただいていることが誇らしかった。平成24年から４年経ってしまったが、このカレンダーは今も大切に保管している。

わがまち杵築の誇り、それはそこで育った人々が目を閉じれば思い出す懐かしい風景を特っていること。

そして、それが同じ世代どうし奇しくも同じ風景であること。ふるさとの共通の風景が心の奥底に自然と宿り、心の拠り所としてずっと存在し続けることである。

「おおいた教育の日」エッセー作品集２
平成 22 年度～平成 28 年度

平成 29 年３月

発行者　大分県教育の日推進会議　大分県教育委員会
〒870-8503　大分市府内町３丁目 10 番１号
TEL　097-506-5528　FAX　097-506-1798
印　刷　三和印刷出版株式会社

手をつなぎ　広げていこう　教育の輪

11月1日は「おおいた教育の日」

「おおいた教育の日」シンボルマーク

教育(Education)の頭文字「E」をモチーフとし、子どもの可能性を無限大(∞)で象徴的に表し、それを大人が包み込むイメージを表しています。